

# 安吉遺跡発掘調査報告（3）

—町道生源寺赤井線造成に係る埋蔵文化財発掘調査報告—

2005年3月

大門町教育委員会





A・B区 全景（南西）



C・D区 全景（南）

# 序

清らかな水が流れ、おおらかな自然に恵まれた大門町には、広大な射水平野が拓かれ、いにしえから人々の生活が営まれていました。

21世紀の現在、昔日の遺産が私たちの目に触れるようになって、魅力ある品々から深い感銘を受けるとともに、それを更に後世に残すことが大切な使命であると実感しております。

本調査は、町道の造成に伴って消え行こうとする先達の遺産を記録として保存し、また子孫に伝えようと、本誌にその成果を収めました。

本誌が多くの方々の目に触れ、活用されて、地域の歴史の解明と理解、また文化財保護の高揚の一助になれば幸いに存じます。

調査の終了に際し、適切な助言指導を賜りました諸先生、調査に協力をいただきました地元関係各位には、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

大門町教育委員会

教育長 荒井茂昭

## 例　　言

- 1 本書は、富山県射水郡大門町及び大島町に所在する、安吉遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、町道生源寺赤井線造成に伴う本調査である。
- 3 調査期間は、2004年6月22日～10月29日（実働59日）、調査面積は4,750m<sup>2</sup>である。
- 4 調査は、大門町教育委員会の管理のもと、株式会社中部日本鉱業研究所が実施した。
- 5 調査は、株式会社中部日本鉱業研究所埋蔵文化財調査室、新宅輝久・松原哲志が担当した。
- 6 本書の編集・執筆は、尾野寺克実（大門町教育委員会）、新宅・松原が担当した。
- 7 調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から御教授、御協力を頂いた。記して感謝の意を表する。  
赤澤徳明・鹿島昌也・加藤正美・金三津英則・金三津道子・久々忠義・久保尚文・島袋春美・新宅　茜  
菅田　薰・高梨清志・藤井喜義・古川知明・保科齊彦・町田賢一・松山充宏・宮田進一・森隆・山崎為雄  
(敬称略・五十音順)
- 8 木札の判読は、保科齊彦氏（新湊市博物館館長）、山崎為雄氏（新湊市博物館研究員）の御協力を得た。
- 9 木札の見解は、久保尚文氏（富山大学非常勤講師）から貴重な御意見をいただいた。
- 10 石質の同定は、野崎　保・小幡真弓両氏（株式会社中部日本鉱業研究所）の御協力を得た。
- 11 本調査の参加者は、以下の通りである。現地調査の作業には、社団法人大門町シルバー人材センターと、社団法人新湊市シルバー人材センターの御協力を得た。

### 【現場作業員】

泉　義正・遠藤正成・甲　輝夫・木沢義明・熊藤秀雄・新保利恵・高田栄次・田中百合子・田畠俊雄  
塚越清一・津田勇人・寺島笑子・中野順一・新田三喜子・野口紀之・長谷一雄・林　憲彦・藤井ふみ子  
朴木忠行・前田明子・真岸与市・三島律子・山田修（敬称略・五十音順）

### 【整理作業員】

安立佳子・加藤由美子・北川泰子・真田恭子・新保利恵・高橋英吏子・角田亜紀子・新田三喜子・橋真理子  
畠シノブ・渡辺賀世子（敬称略・五十音順）

- 12 出土品・記録資料は、大門町教育委員会にて保管している。

## 凡　　例

- 1 方位は全て座標北であり、水平基準線は海拔高で表示した。
- 2 遺構の表記は、次の記号を用いた。  
SE：井戸　　SD：溝　　SK：土坑　　SP：ピット　　SX：不明
- 3 図中に用いた網掛け部分は、それぞれ以下の事を表す。  
■：煤付着　■：搅乱　■：遺構範囲　■：自然堆積　■：珠洲の断面
- 4 本書での土層注記の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』(2002年版)に準拠している。
- 5 実測図は、原則的として土器・漆器を1/3、遺構平面図及び断面図を1/80で示し、縮尺率は各頁に掲載した。

## 本文目次

I 序章 .....	1
1 遺跡の位置と環境 .....	1
II 調査に至る経緯と経過 .....	3
1 調査に至る経緯 .....	3
2 調査の経過 .....	3
III 調査 .....	4
1 層序 .....	4
2 調査区の概要 .....	4
3 遺構 .....	7
(1) 土坑 .....	7
(2) 井戸 .....	8
(3) 溝 .....	11
4 遺物 .....	19
(1) 土坑 .....	19
(2) 井戸 .....	21
(3) 溝 .....	25
(4) その他の遺構及び包含層出土遺物 .....	36
IV 総括 .....	37
<参考文献> .....	39
V 大門町安吉遺跡出土漆器の塗膜構造調査 .....	40

## 挿図目次

第1図 安吉遺跡と周辺図（中世） .....	2
第2図 調査区全体図 .....	3
第3図 基本土層図 .....	4
第4図 A・B区遺構全体図 .....	5
第5図 C・D区遺構全体図 .....	6
第6図 B区SK33遺構平面図及び土層図 .....	7
第7図 B区SE1・SE2・SE5・SE7・SE8遺構平面図及び土層図 .....	9
第8図 B区SE4・SE11・SE15・SE16遺構平面図及び土層図 .....	10
第9図 A区SD8・SD9・SD13遺構平面図及び土層図 .....	12
第10図 B区SD16・SD22遺構平面図及び土層図 .....	13
第11図 B区SD24・SD25遺構平面図及び土層図 .....	15
第12図 B区SD28・SD30遺構平面図及び土層図 .....	16
第13図 B区SD35遺構平面図及び土層図 .....	17

第14図 C区SD43・D区SD63位置図と遺構平面図及び土層図 .....	18
第15図 SK33出土遺物 .....	20
第16図 SE1・SE4出土遺物 .....	22
第17図 SE4出土石製品 .....	23
第18図 SE7・SE8・SE15・SE16出土遺物 .....	24
第19図 SD9・SD16出土遺物 .....	25
第20図 SD16出土土器 .....	26
第21図 SD16出土木製品及び石製品 .....	27
第22図 SD22出土遺物 .....	28
第23図 SD25・SD28・SD30・SD35出土土器 .....	30
第24図 SD28・SD30出土漆器椀 .....	32
第25図 SD28・SD30出土木製品 .....	33
第26図 SD25・SD28・SD30・SD35出土石製品及び金属製品 .....	34
第27図 その他の遺構及び包含層出土遺物 .....	36
第28図 B区時期別遺構図 .....	38

## 表目次

表1 SK33出土遺物一覧表 .....	19
表2 SE出土遺物一覧表 .....	24
表3 SD出土遺物一覧表 .....	35
表4 その他の遺構及び包含層出土遺物一覧表 .....	36
表5 調査資料 .....	40
表6 塗膜断面の観察結果表 .....	41

## 写真図版目次

図版1 調査区全景 .....	42
図版2 主要出土遺物 .....	43
図版3 遺構完掘及び遺物出土状況 .....	44
図版4 遺構完掘及び遺物出土状況 .....	45
図版5 出土土器 .....	46
図版6 出土土器 .....	47
図版7 出土漆器 .....	48
図版8 出土木製品 .....	49
図版9 出土石製品 .....	50
図版10 石材及び金属製品 .....	51

# I 序 章

## 1 遺跡の位置と環境

大門町は、富山県の中央北部に広がる射水平野の南西端に位置し、北は大島町、東は小杉町、南と西は庄川を挟んで高岡市に接している。地形は、庄川右岸と町内を南北に貫流する和田川の扇状地が大部分を占め、町の南側は射水丘陵の裾部がせまる。今回発掘調査を行った安吉遺跡は、大門町東部に位置し、標高6.0m～6.5mに立地する15世紀から17世紀頃までの中近世の遺跡である。安吉地区周辺の遺跡には、北に赤井遺跡（古代・中世）、東に本田天水遺跡（古代）、南に本田宮田遺跡（弥生後期・古墳・中世・近世）、西に二口遺跡（縄文後・晚期）が確認されており、付近一帯は縄文時代から生活の場となっていた事が判る。奈良時代の頃、安吉遺跡を含む周辺地域は「三島野」と呼ばれる広大な平野が展開していた<sup>(註1)</sup>。歌人大伴家持がこよなく愛した事でも知られており、放鷹の適地であった。

中世の安吉遺跡周辺の様相復元を行う為、古地図を基に遺跡周辺地図を作製した（第1図）。これを見ると安吉遺跡は、東神楽川と西神楽川の二河川に挟まれている。神楽川は、地図下部に位置する射水丘陵から流れ出る和田川の事を指していたが、旧櫛田郷竹原領より神楽川と呼び名を変え、円池から市井・竹鼻・本田・鳥取・作道・久々湊を経て、放生津潟へ流れ込んでいた。神楽川は、安吉遺跡の南方約1.4km（現在の大門町竹鼻付近）で東西に分かれる。東へ流れる本流は東神楽川とも呼ばれ、西へ流れる支流は西神楽川と呼ばれた。東西神楽川は、安吉遺跡を挟み込み、一方は放生津潟へ、もう一方は富山湾へ向けて流れる。現在の和田川は、竹鼻よりも南の円池村付近で西へ向かい、庄川に合流する。

その神楽川は、放生津から安吉集落のすぐ東にある本田領まで、帆掛け舟がさかのぼっていたと伝えられる。寛政6年（1794）の記録では、円池村より下流の川幅が12～15m程であったとされている事から、古くより水路として積極的に活用されていたと想像するに難くない。安吉遺跡が展開していた当時、和田川（神楽川上流）は神保氏の拠点である増山城に近接し、西神楽川下流では同じく神保氏拠点である放生津城の脇を流れていた。また東神楽川は、安吉遺跡の南方から物資の集積地である放生津まで延びていた。このように、和田川を上流とする東西の神楽川は、物資の輸送を行うにはうってつけの河川であったと考えられる。

一方、陸路に目を向けると、室町時代安吉遺跡近隣には、幕府四番衆の小田氏が領していた下条が東に位置し、西には桃井氏が領していた浅井があった。その他、石清水八幡宮領や金山保が見られ、これらを及ぶ交通網が敷かれていたと考えられる。戦国時代には、小矢部川左岸を通る北陸道は、守山から二上の渡りを越えた後に放生津方面と大門方面に分かれ、放生津方面の道は下村へ、大門方面の道は安吉の西約500mに位置する二口を経て水戸田へ抜けていた。また、天正13年（1585）の豊臣秀吉による佐々成政征討の際は、戸出・中田・水戸田・黒河・花木を経て追分茶屋へ抜ける中田道を通ったとされ、中田道は安吉遺跡の南2.5kmに位置し、越中の東西を結ぶ重要な街道であった。江戸期になると、魚津城から高岡に通ずる御普請道であった草島往来が、高岡城築城後に御鷹野道（県道小杉・大門線）と称される鷹狩の道となった。この道は、安吉遺跡の北150mに位置する。

これらの事より、中世期の安吉遺跡は、物資の輸送・流通ルートとしての東西神楽川が遺跡の東西を流れ、主要道路もしくはその前身となった道路が付近を通る、交通の便に恵まれた地点に立地していたと考えられる。

註1 旧水戸田（水戸田・若林・開口・市井・竹鼻）、旧二口村（本江・二口・中村・棚田・安吉・本田・下若）旧大島村の大半を含めた地域を「三島野」と呼ぶ。『大門町史』「古代の郷土」（1981）



第1図 安吉遺跡と周辺図（中世）

## II 調査に至る経緯と経過

## 1 調査に至る経緯

### 調査に至る経緯

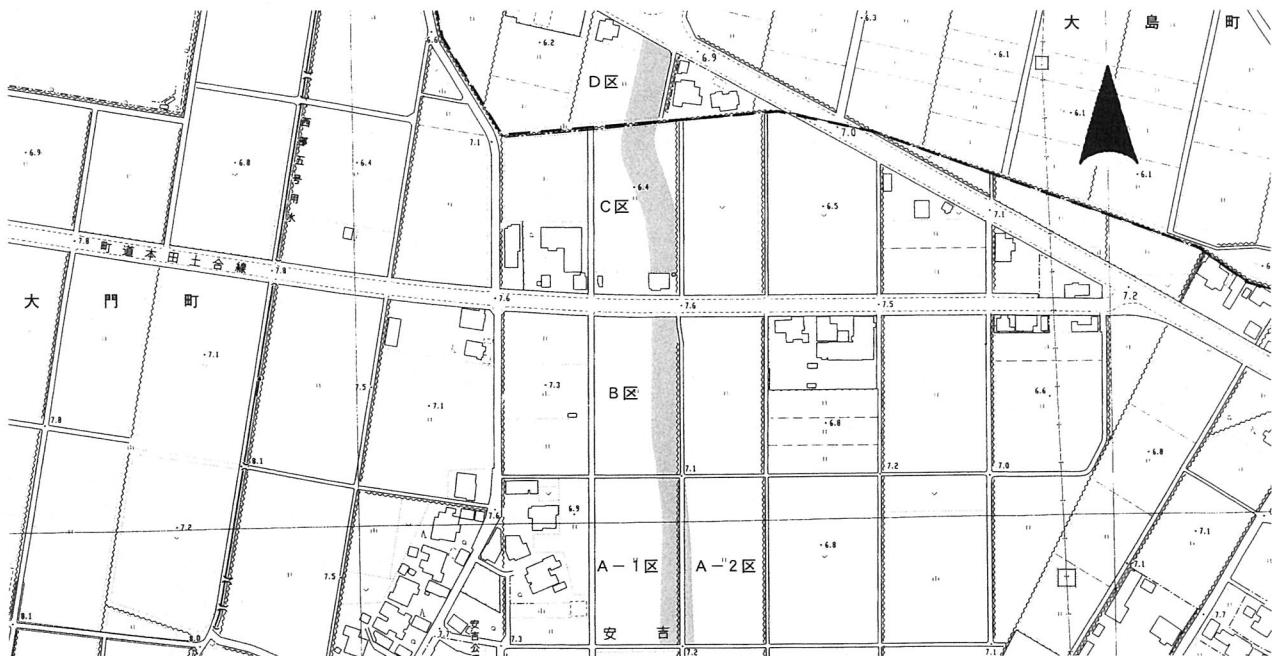
大門町では、平成13年度より町道生源寺赤井線の造成事業を計画、平成16年度から着工した。事業は、生源寺から安吉に至る農免農道を町道とし、更に安吉から大島町赤井地内までの区間は新規に道路を延ばすもので、新規造成部の延長は約550m、幅員は15mの計画である。

新規に造成する安吉地内の区間は、平成6年度に実施した試掘調査【大門町教育委員会1997】により、埋蔵文化財包蔵地であることを確認しており、新規造成計画の内、約390mがその対象となる。

町教育委員会と町建設課との協議の結果、町道の計画路線は、包蔵地のほぼ中央を南北に貫く形で計画されており、路線を変更する等の保護措置是不可能である為、工事に先立って本調査を実施し、記録保存することとなった。

## 2 調査の経過

調査対象地は、町道の本田土合線及び農道により5分割されている為、南から北へ向かって、A・B・C・D区とし、A区は西側をA-1区、東側をA-2区とした。A～C区は大門町安吉地内、D区は大島町赤井地内にあたる。6月22日から現場事務所を設置し、翌23日から備品の搬入を開始した。農作物収穫時期の関係上、重機による表土掘削は2回に分けて行われ、A～C区を6月24日から7月6日まで行った。6月30日より作業員による人力掘削を開始し、A区から順に遺構検出・遺構掘削、並びに記録作業を行った。8月9日には、B区のSK33から青磁碗と木札が同一場所で出土し、写真撮影後出土地点を記録し、遺物の取上げを行った。その後、発掘調査と現地復旧作業の関係から、航空写真測量も2回に分けて行う事にし、それに先立って、9月2日にスカイマスターを用い、A・B区内遺構完掘状況の全景撮影を行った。翌9月3日にラジコンヘリコプターにて航空写真測量を行い、A・B区の調査を完了した。D区の表土掘削は、9月22日に重機を搬入し、9月24日まで行った。その後、D区の遺構検出・遺構掘削・記録作業を行い、10月13日には、C・D区の航空写真測量を実施した。10月19日に現場事務所を撤去し、10月29日には、現地復旧作業を含め現地調査を終了した（実働59日間）。



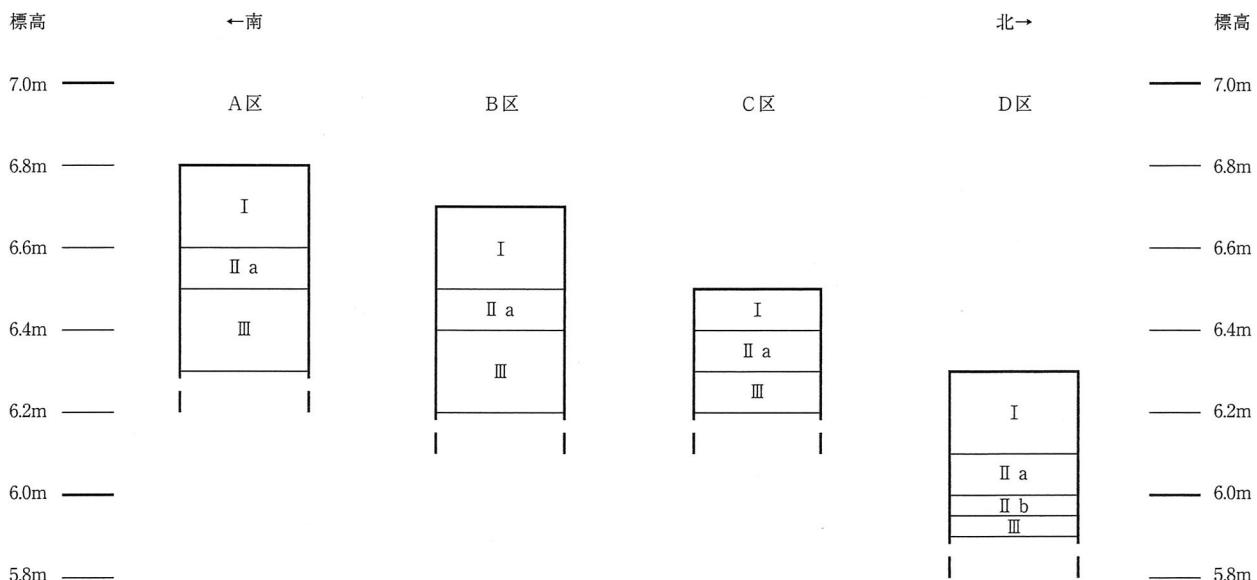
第2図 調査区全体図 (1/5000)

### III 調査

#### 1 層序

各調査区内の基本層序はほぼ同一であったが、D区のみやや異なっていた。土層の堆積状況は、南側が高く、北へ向かうに連れて下り傾斜となっていた。以下に層序の内容を示す。

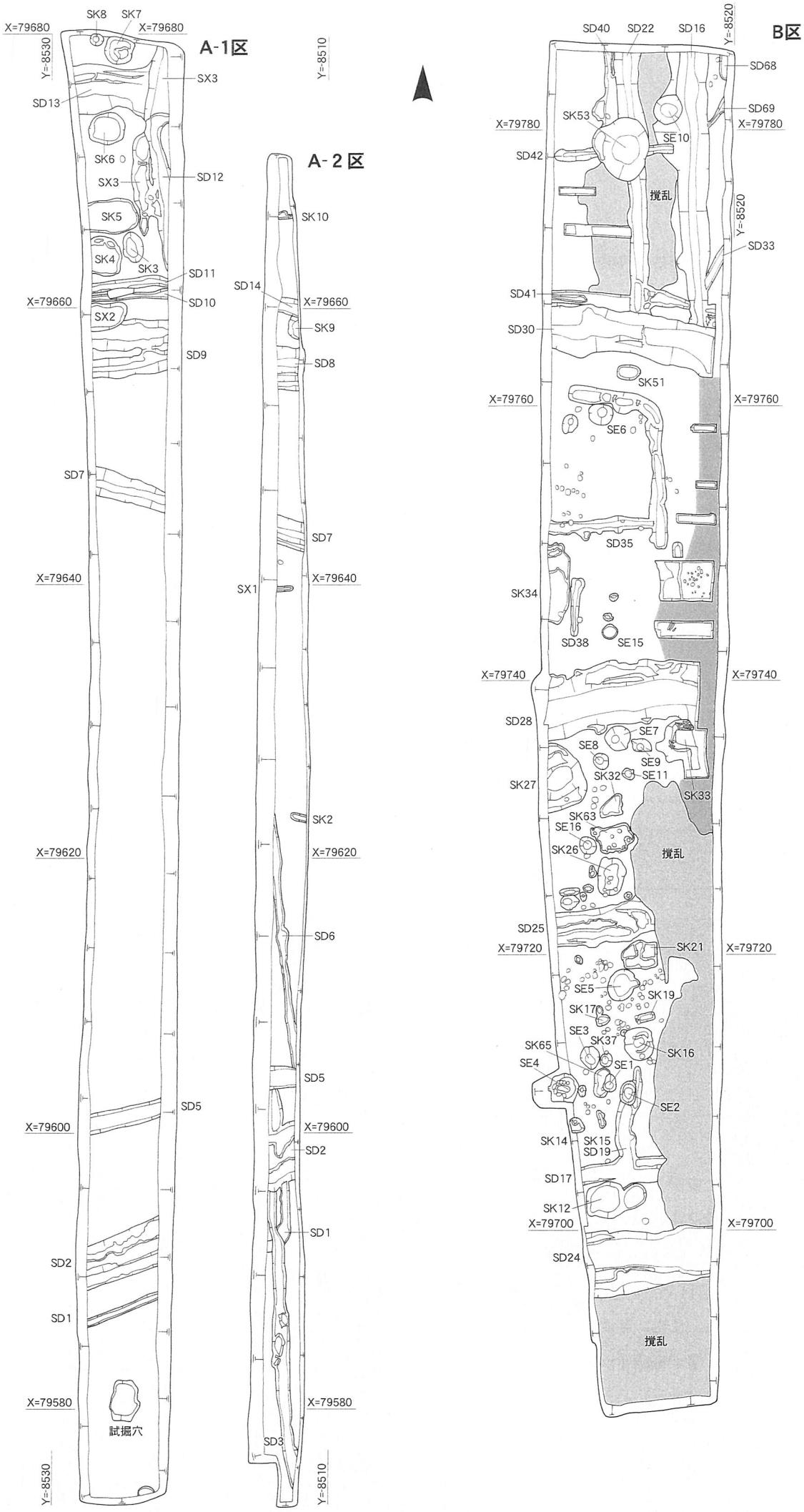
第I層は現耕作土で、黒褐色粘質土を呈する。層厚10~40cm。第II層は遺物を含む床土で、a・bの2層に分かれ。IIa層は各調査区で確認できるが、平成6年度に行われた圃場整備により削平され、部分的に確認されない箇所もある。土色は黒褐色を呈し、締まりの強い粘質土である。層厚は0~30cm。IIb層は、D区にのみ堆積が見られた。土色は、オリーブ褐色を呈する締まりの良い粘質土で、直径1~2cmの黒色粘質ブロックを多く含む。層厚は5~10cm。第III層は、黄灰色を呈する。遺構検出面である。締まりは良く、粘性は強い。直径1~2cmの黒色粘質ブロックと、燈色の鉄分を多く含む。層厚は10~20cm。南側で厚く堆積し、北へ行くと層厚が薄くなり検出面は低くなる。IIb層が北側にのみ確認されるのは、III層の検出面が他の調査区よりも低い位置にある為と考えられる。



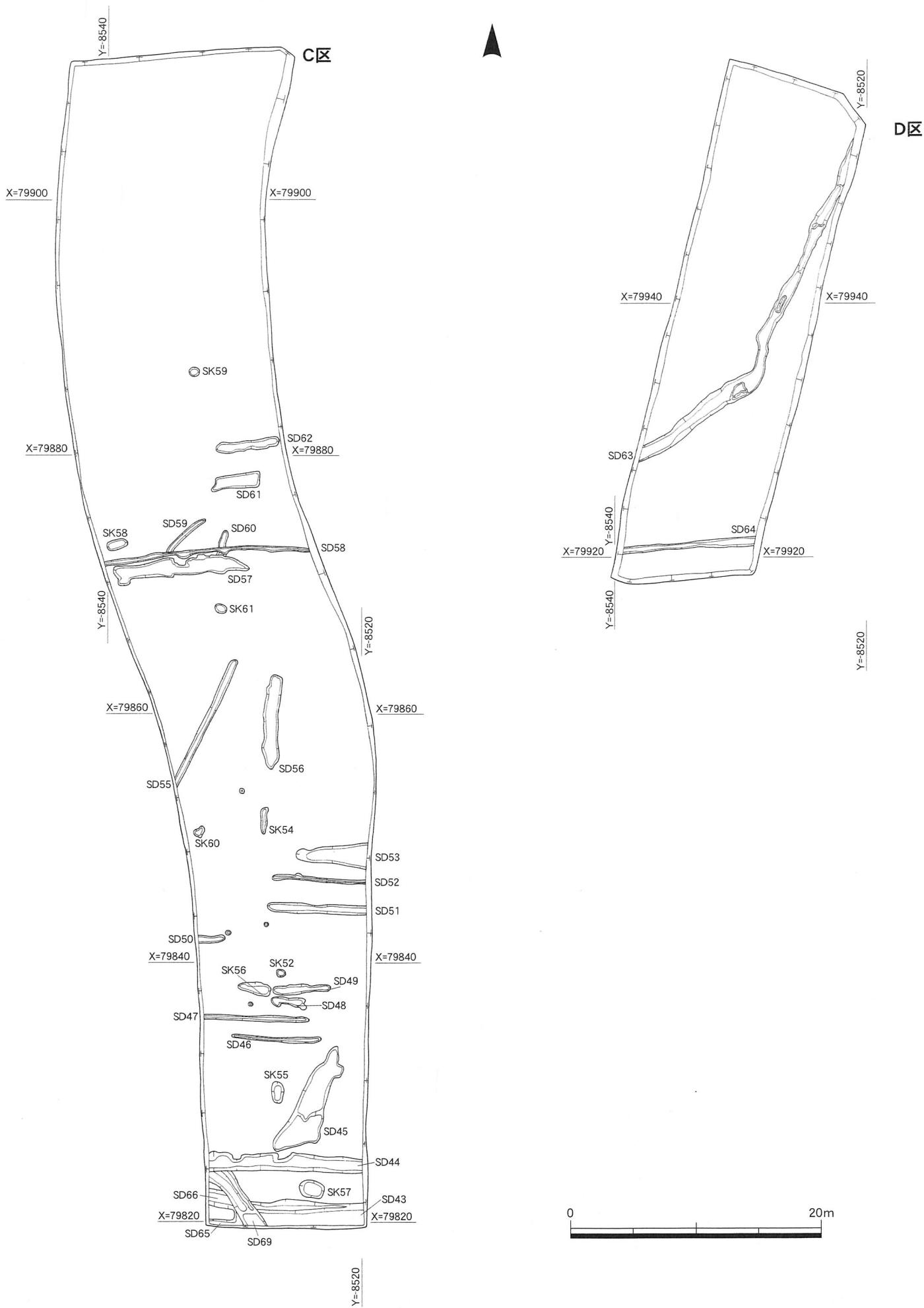
第3図 基本土層略図

#### 2 調査区の概要

今回調査を行った安吉遺跡は、南北385m、東西16mと狭長で、調査対象地区全体の面積は4,750m<sup>2</sup>であった。検出された遺構数は、溝55条、井戸13基、土坑46基、ピット133基、不明遺構3基で、建物のプランは確認できなかった。各調査区から検出された遺構の内訳は、A区で土坑11基・溝11条・ピット2基、B区で土坑27基・井戸13基・溝20条・ピット128基、C区で土坑8基・溝22条・ピット3基、D区で溝2条となる。B区に遺構が集中し、南北へいくと遺構密度が低くなる。また、平成10年度に行われた安吉遺跡発掘調査の報告からは、当該地より東へ行くに従い、遺構数が減少してゆく事が確認されている。出土遺物で見ると、A区では、中世土師器・珠洲焼・伊万里等が出土している。B区では、珠洲焼を中心に中世土師器や青磁・木製品・石製品等が出土している。C区では、中世土師器や珠洲焼といった中世の遺物が出土するが、点数は少なかった。D区からは土師器が少量出土している。



第4図 A・B区遺構全体図 (1/400)



第5図 C・D区遺構全体図 (1/400)

### 3 遺構

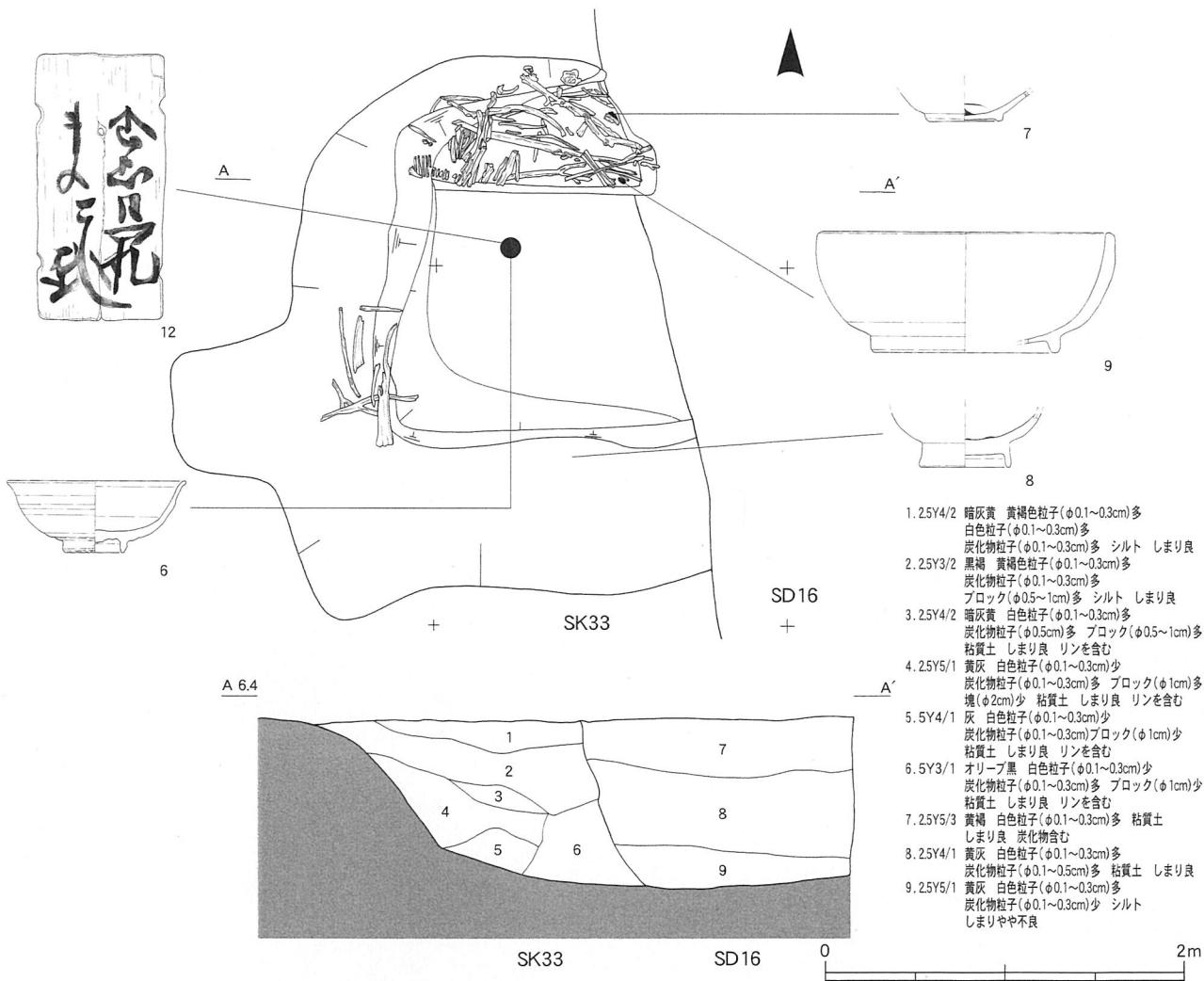
今回の調査で検出された遺構は、土坑・井戸・溝・ピットが挙げられる。覆土からの遺物より、古墳時代・中近世に分けられるが、ほとんどは中世に属するものであった。ピットは多く検出されたが、建物跡は確認されなかった。

#### (1) 土坑

土坑は総数46基あり、多くはB区で検出された。SK33は良好な出土遺物に恵まれ、後述するSD16との切り合い関係から時期特定が可能な土坑であった。その他の土坑は出土遺物量が少なく、切り合い関係も見られなかった。

#### SK33 (第6図)

B区のほぼ中央で確認された遺構である。規模は長軸3.0m、短軸2.04mを測り、土坑の東側半分をSD16に切られる為、平面形状は方形になる。深さは1.03mと深く湧水があった。覆土は灰色を基調とする締まりの良い粘質土で、上層には白色粘質ブロックが混じる。全体的に炭化物粒子を若干含む。土坑内北側と西側の地山部分からは、多量の木片が検出された。薄板状に加工されているものも少量得られ、土坑肩部を擁護していたものと考えられる。土坑内からは、中世土師器・青磁・珠洲焼・箸状木製品・漆器・木札が出土した。木札直下には、木札周辺と同一の覆土を挟んで青磁碗が出土している為、青磁碗と同時期に廃棄された可能性が高い。中世土師器皿と漆器碗は、15世紀後半～16世紀初めに比定される。



第6図 B区SK33遺構平面図及び土層図 (1/40)

## (2) 井戸

井戸は、B区で集中して検出された。井戸の総数は13基で、素掘り井戸が12基、石組み井戸が1基であった。掘形は、円筒形・漏斗形・擂鉢形の3種認められた。現在の湧水点は、井戸検出面から60cm程掘り下げた高さ（標高約5.8m）であった。以下、個々の井戸について記述する。

### SE1（第7図）

B区の南側で検出された素掘り井戸である。平面形は不整形で、掘形は円筒形であった。規模は長軸1.26m、短軸0.9mを測り、深さは1.85mと、他の井戸と比較して深かった。覆土は締まりの弱い黒褐色粘質土を主体とし、青灰色のシルトブロックが多く混入する。出土遺物は、15世紀代の中世土師器皿と珠洲焼甕ほか、板材に鳥の絵柄を線刻した木箱の蓋（第16図15）や、Y字状の自然木両端を加工した部材等が出土した。

### SE2（第7図）

B区の南側で検出された素掘り井戸で、SE1に東接する。平面形状は橢円形で、掘形は漏斗形であった。規模は長軸1.71m、短軸1.18m、深さは1.34mを測る。覆土は締まりの弱い黒褐色粘質土を基調とし、青灰色のシルトブロックが混じる。出土遺物は、水溜として使用されていた曲物片が最下層より出土した。

### SE4（第8図）

B区の南側で検出された石組み井戸で、SE1に西接する。平面形は円形で、規模は長軸2.12m、短軸2.03m、深さは1.93mを測る。覆土下層は締まりの良い灰色シルトで、上層は締まりの強い黒色粘質土に黄色粘質ブロックを含む。石組みは、地山面から0.8m掘り下げた地点で検出された。石組みを構成している石材は、未加工品の他に、火輪・水輪、宝篋印笠といった製品の一部も見られた。付近にあったものを転用したものだろう。それらの石材は2～3段組で検出された。水溜に曲物は無く、拳大の礫が少量見られた。覆土からは、青磁碗や盤、16世紀中頃の漆器小皿が下層より出土した。

### SE5（第7図）

Bの南側で検出された素掘り井戸で、SE1の北側に位置する。井戸の南側は、暗渠により切られる。平面形は不整形で、規模は長軸2.51m、短軸1.77m、深さ1.05mを測る。掘形は擂鉢形になる。覆土下層は締まりが弱く粘性の強い灰土を基調とし、下部には有機物が混じる。上層は、締まりの強い黒褐色粘質土に白色ブロックを多く含む。覆土からの遺物の出土は無かった。

### SE7（第7図）

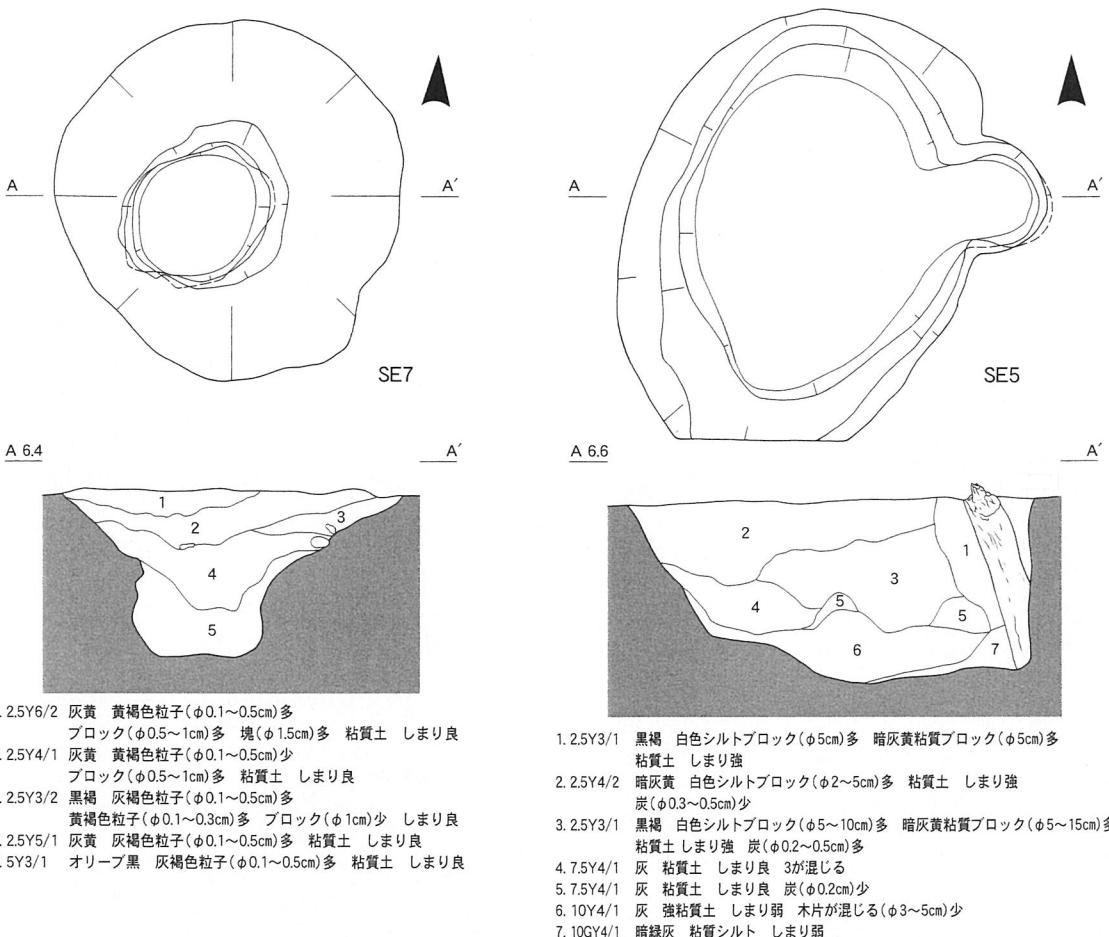
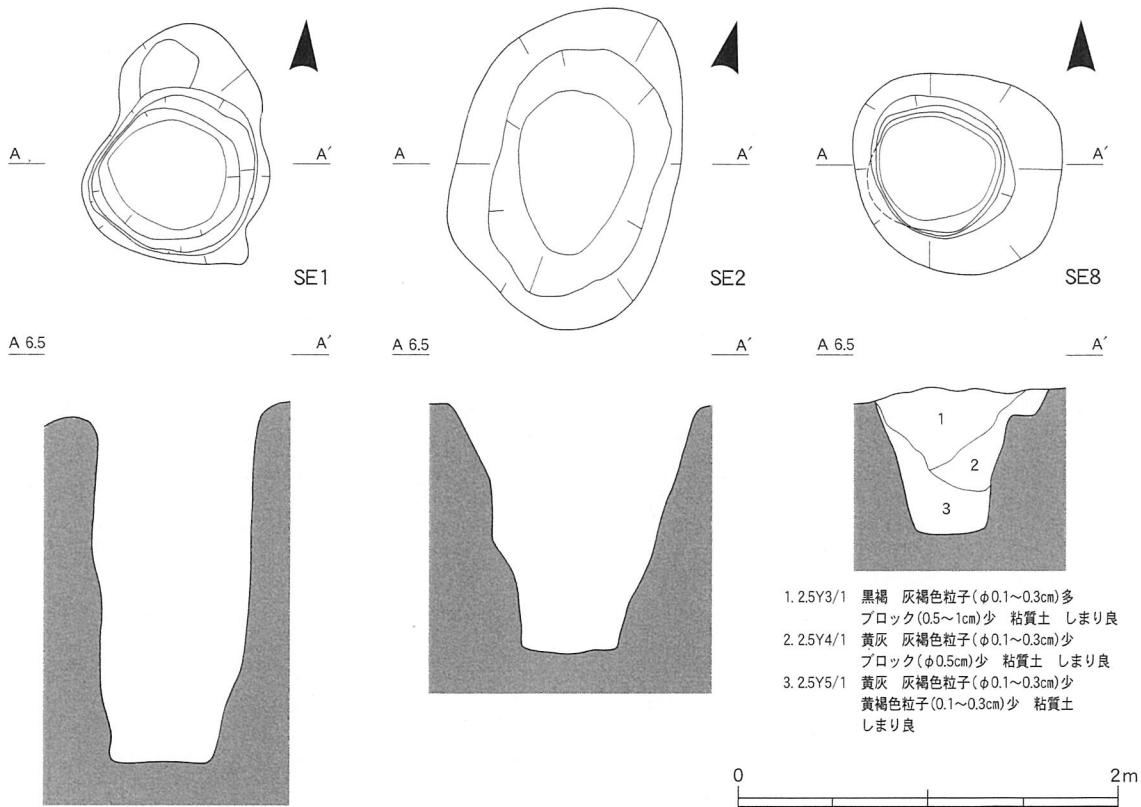
B区のほぼ中央で検出された素掘り井戸である。平面形は円形であり、規模は長軸1.90m、短軸1.82m、深さは0.92mを測る。掘形は漏斗形になる。覆土下層は黒褐色粘質土、上層が灰黄色粘質土となり、下部へ行くほど粘性が強くなる。共に締まりは良い。覆土からは、15世紀前半の中世土師器皿と箸状木製品が出土した。

### SE8（第7図）

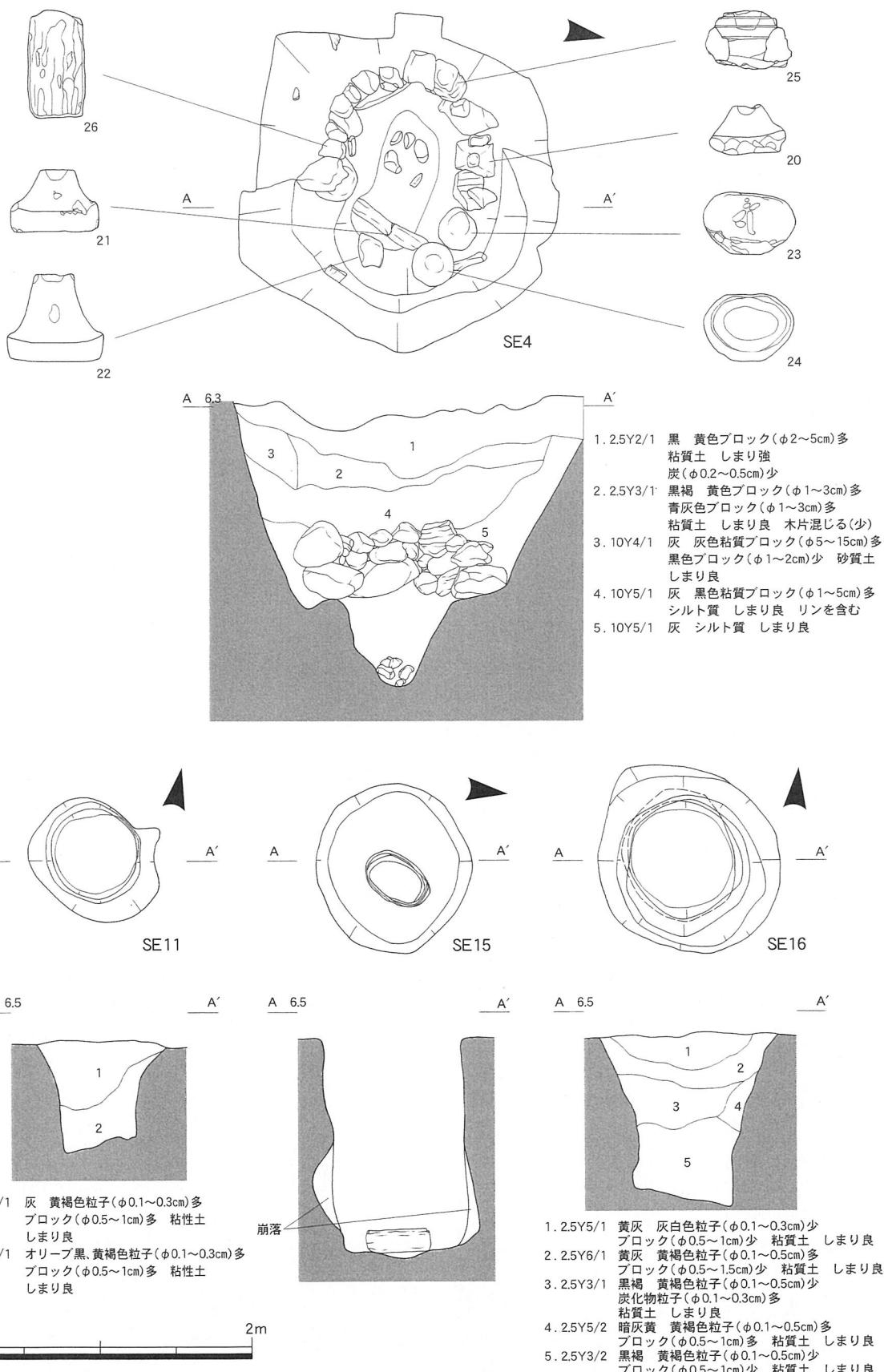
B区のほぼ中央で検出された素掘り井戸で、SE7の南西に隣接する。平面形は円形であり、規模は長軸1.18m、短軸1.07m、深さは0.83mを測る。覆土下層は黄褐色粘質土で、上層は黒褐色になる。共に締まりは良い。遺物には15世紀中頃の中世土師器皿・珠洲焼の他、上層より16世紀中頃の漆器椀が出土した。

### SE11（第8図）

B区のほぼ中央で検出された素掘り井戸で、SE7の南東に隣接する。平面形は橢円形であり、規模は長軸0.88m、短軸0.68mを測る。深さは0.76mとやや浅い。覆土下層はオリーブ黒色の粘質土で、上層は灰色粘質土となる。共に締まりは良い。覆土から珠洲焼甕が出土した。



第7図 B区SE1・SE2・SE5・SE7・SE8遺構平面図及び土層図 (1/40)



第8図 B区SE4・SE11・SE15・SE16遺構平面図及び土層図 (1/40)

#### **SE15（第8図）**

B区のほぼ中央で検出された素掘り井戸である。平面形は円形であり、規模は長軸1.13m、短軸1.02m、深さは1.38mを測る。掘形は円筒形になる。覆土は締まりの弱い黒褐色粘質土で、水溜には底板を抜いた小判形の曲物が転用されている。曲物は地山に設置されている状態で出土した。下層からは刀子が出土した。

#### **SE16（第8図）**

B区のほぼ中央で検出された素掘り井戸で、SE8の南側に位置する。平面形は円形であり、規模は長軸1.36m、短軸1.19m、深さは1.16mを測る。掘形は漏斗形になる。覆土下部は黒褐色粘質土を基調とし、上部は黄灰色粘質土である。共に締まりは良い。覆土からは、青磁碗と珠洲焼甕が出土した。

### **(3) 溝**

溝は総数55条でB・C区から集中して検出された。流水方向は、南から北、西から東である。溝幅は3m前後の幅広なものと、1m以下のものとに大別される。覆土の遺物から、埋没時期を古墳時代・中近世に分ける事ができる。A区では中近世の遺物が出土し、B・C区では中世のものが主であった。D区では古墳時代の遺物のみが出土している。本稿で紹介する遺構は覆土からの出土遺物が多く、溝の埋没年代が推察可能であるものや一定の区画性が窺えるものを取り上げた。以下、個々の溝について記述する。

#### **SD8（第9図）**

A-2区北側で検出された東西溝である。規模は長さ1.9m、最大上幅3.0m、最大深度0.65mを測り、溝方向はN-87°-Wであった。覆土は締まりの良い黒褐色粘質土で、上部には黄色シルトブロックを大量に含みほぼ水平堆積であった事から、人為的に埋没したと考えられる。覆土から遺物は出土しなかった。

#### **SD9（第9図）**

A-1区北側で検出された東西溝である。規模は長さ8.3m、最大上幅2.2m、最大深度0.46mを測り、溝方向はN-87°-Eであった。覆土は締まりの良い黒褐色粘質土で、上部には白色シルトブロックを大量に含みほぼ水平堆積であった事から人為的に埋没したと考えられる。覆土からは、珠洲焼擂鉢と壺が出土した。

#### **SD13（第9図）**

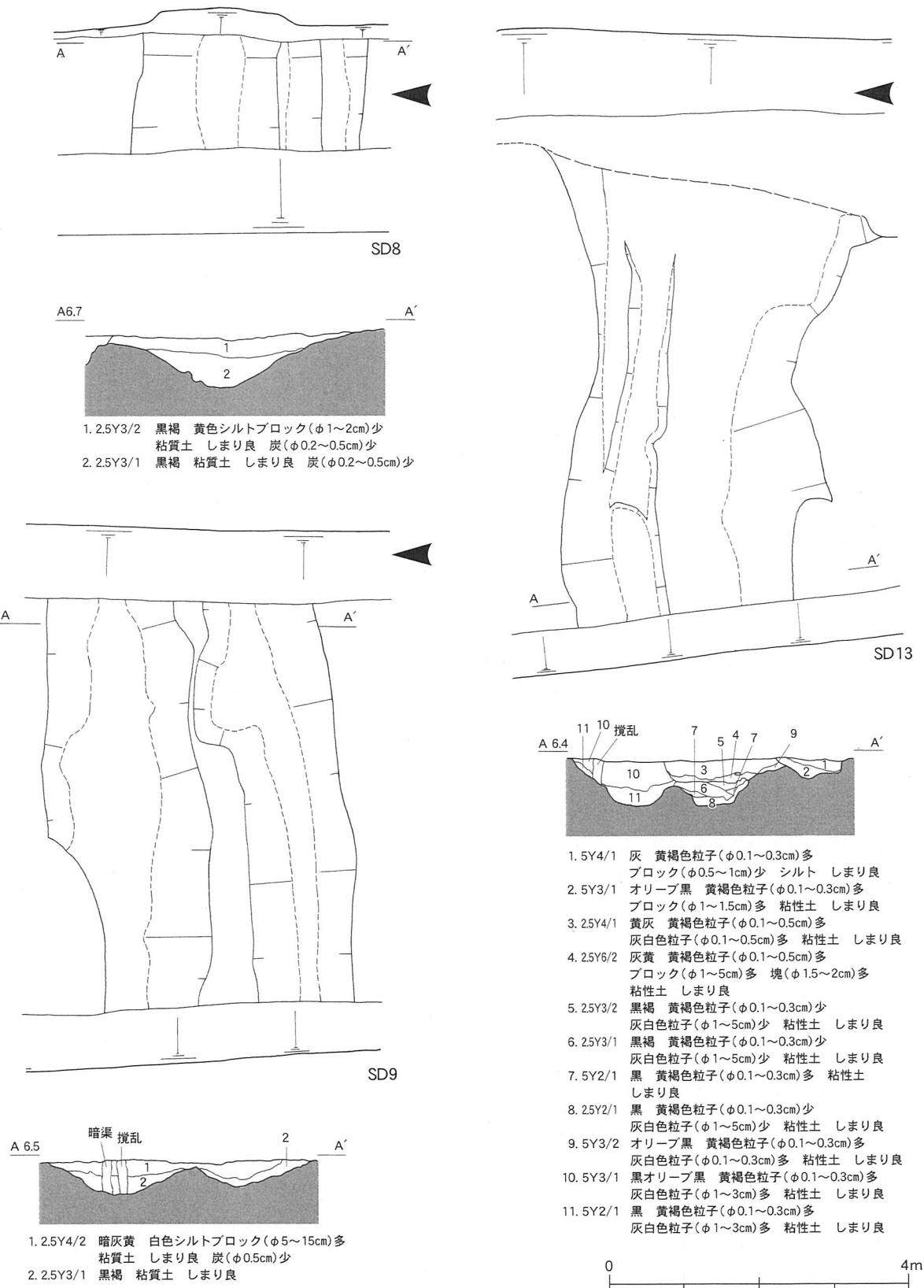
A-1区最北で検出された東西溝である。規模は長さ8.4m、最大上幅3.7m、最大深度0.6mを測り、溝方向はN-87°-Eであった。覆土は、締まりの良い黒色粘質土を基調とし、上部はオリーブ色を帯びる。覆土から遺物の出土は無かった。

#### **SD16（第10図）**

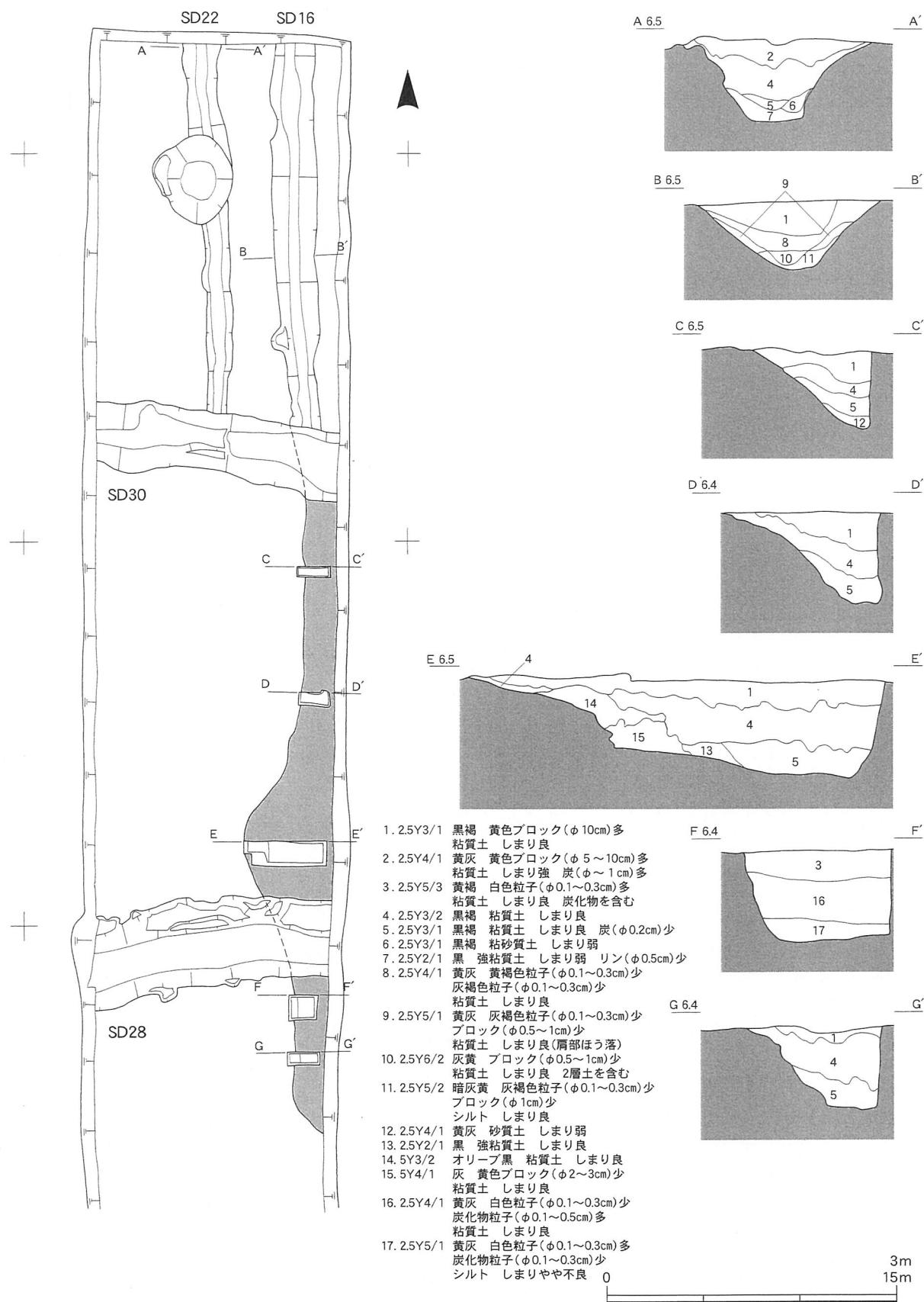
B区の北側で検出された南北溝である。危険回避の為、溝の南側はサブトレントにて堆積状況等を確認した。規模は長さ46.9m、上幅2.42m、最大深度1.0mを測り、溝方向はN-2°-Wであった。覆土は締まりの良い黒褐色粘質土で、上部には黄色粘質ブロックを大量に含みほぼ水平堆積であった事から、人為的に埋没したと考えられる。B-B'の堆積状況から、一度再掘削が行われたあとが観察できる。第6図からは、SK33埋没後にSD16が開削された事が窺える。また、溝の南側ではSD28の東西溝に一部切られ、北側ではSD30の東西溝に一部切られる。覆土からは、中世土師器皿・珠洲焼擂鉢・壺・甕・瀬戸美濃香炉・越前甕・漆器椀・柄杓・下駄・硯・石鉢・石臼・石仏・空風輪・水輪が出土した。

#### **SD22（第10図）**

B区北側で検出された南北溝である。SD16の西側で並走する。規模は長さ17.3m、最大上幅2.0m、最大深度0.84mを測り、溝方向はN-4°-Wであった。覆土は締まりの良い黒褐色粘質土を基調とし、下部は粘性が強くなる。A-A'では、5層が7層を掘込んでる様子が観察できる。覆土からは、中世土師器皿と珠洲焼擂鉢が出土した。



第9図 A区SD8・SD9・SD13遺構平面図及び土層図 (1/80)



第10図 B区SD16・SD22遺構平面図及び土層図 (1/300・1/60)

#### **SD24（第11図）**

B区の南側で検出された東西溝である。規模は長さ8.9m、最大上幅3.8m、最大深度0.9mを測り、軸方向はN-87°-Eであった。覆土は締まりの良い黒褐色粘質土である。覆土からは、珠洲焼壺と円形板が出土した。溝の東側上部は搅乱を受けている。

#### **SD25（第11図）**

B区の中央やや南側で検出された東西溝である。規模は長さ7.2m、最大上幅2.8m、最大深度0.4mを測り、溝方向はN-81°-Eであった。覆土は締まりの良い黒褐色粘質土である。覆土からは、16世紀代の中世土師器皿・珠洲焼甕・石臼・砥石が出土した。溝の東側は搅乱を受けている。

#### **SD28（第12図）**

B区の中央で検出された東西溝である。規模は長さ13.6m、最大上幅4.6m、最大深度1.0mを測り、溝方向はN-84°-Eであった。覆土は締まりの良い黒色粘質土を基調とし、上部では黄褐色粘質ブロックを大量に含み、人為的に埋没した様相を示す。覆土からは、中世土師器皿・青磁香炉・珠洲焼壺擂鉢・甕・越中瀬戸皿・漆器椀・円形板・石臼・火輪・石仏・砥石が出土した。最下層からは、16世紀後半～17世紀前半に相当する越中瀬戸小皿が出土している。溝東部ではSD16を切っている。

#### **SD30（第12図）**

B区の北側で検出された東西溝である。規模は長さ11.3m、最大上幅3.8m、最大深度0.8mを測り、溝方向はN-80°-Wであった。覆土は締まりの良い黒褐色粘質土で、上部には黄色粘質ブロックを大量に含みほぼ水平堆積であった事から、人為的に埋没したと考えられる。覆土からは、中世土師器皿・青磁碗・珠洲焼擂鉢・瀬戸美濃天目碗・染付皿・漆器椀・柄杓・下駄・豎杵・空風輪・砥石・用途不明の鉄製品が出土した。溝東側ではSD16を切っている。

#### **SD35（第13図）**

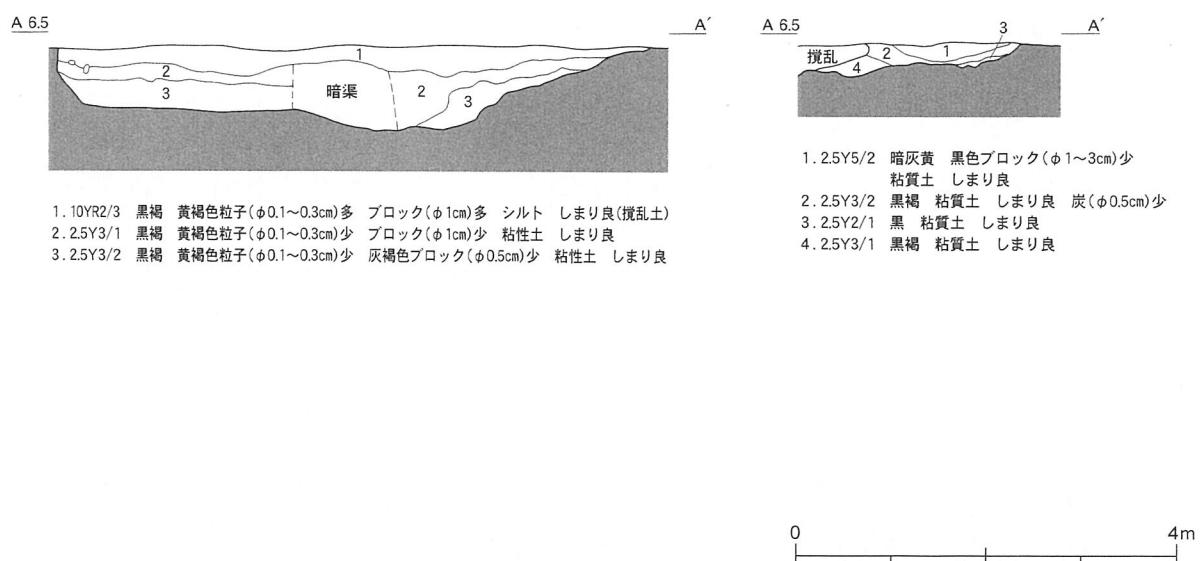
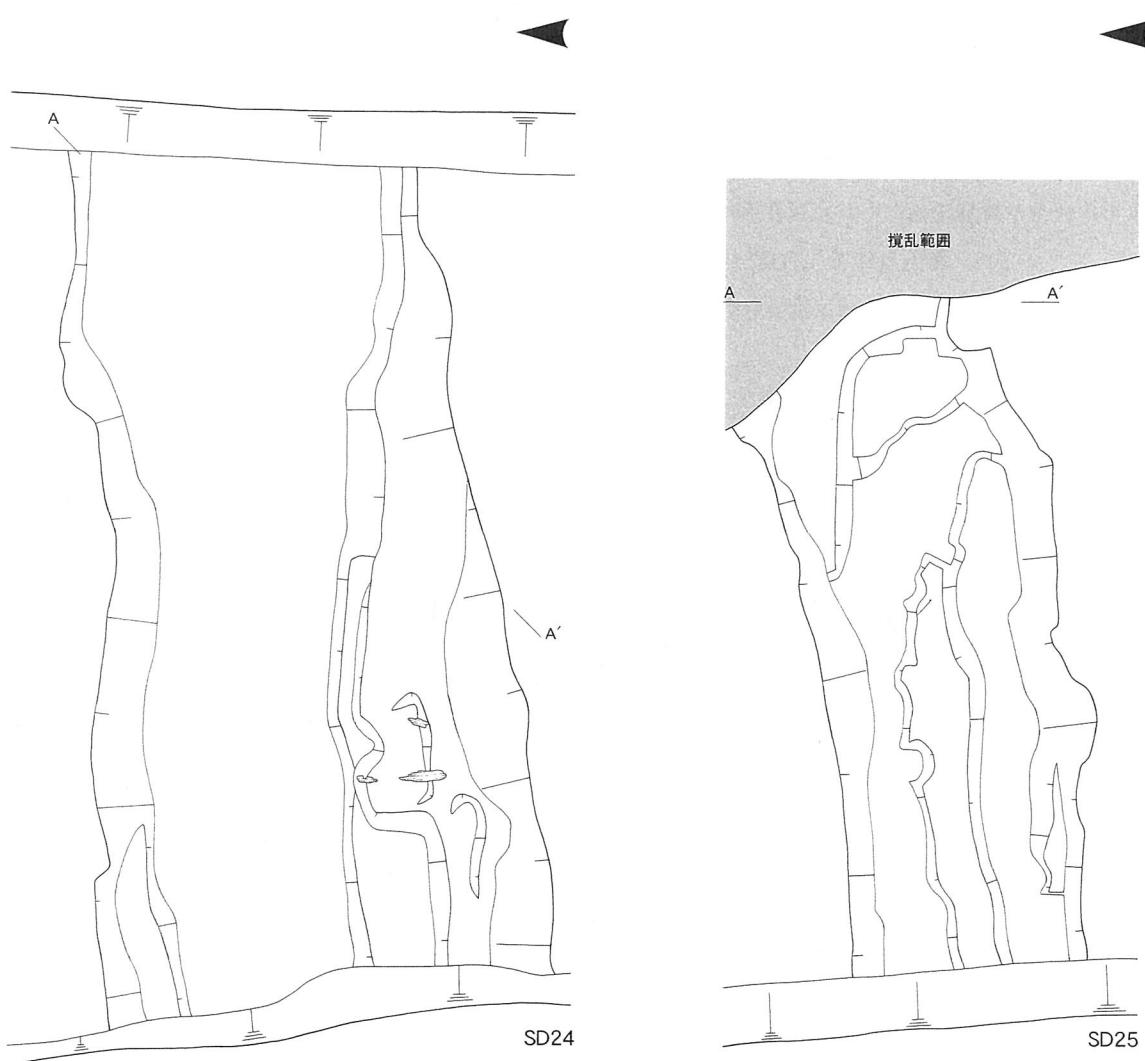
B区北側で検出された「コ」の字状の方形区画溝である。3方向の規模は全長24.0m、最大上幅1.6m、最大深度0.65mを測り、軸方向は北側溝がN-82°-W、東側溝がN-3°-W、南溝がN-87°-Eであった。覆土は、締まりの良い黒色粘質土を基調とし、部分的に褐色を帯びる。覆土からは、16世紀代の中世土師器皿と青磁碗・珠洲焼甕・漆器皿・砥石が出土した。

#### **SD43（第14図）**

C区の南側で検出された東西溝である。規模は長さ8.2m、最大上幅2.0m、最大深度0.5mを測り、軸方向はN-89°-Wであった。覆土は締まりの良い黒褐色粘質土である。覆土からは珠洲焼甕が出土した。

#### **SD63（第14図）**

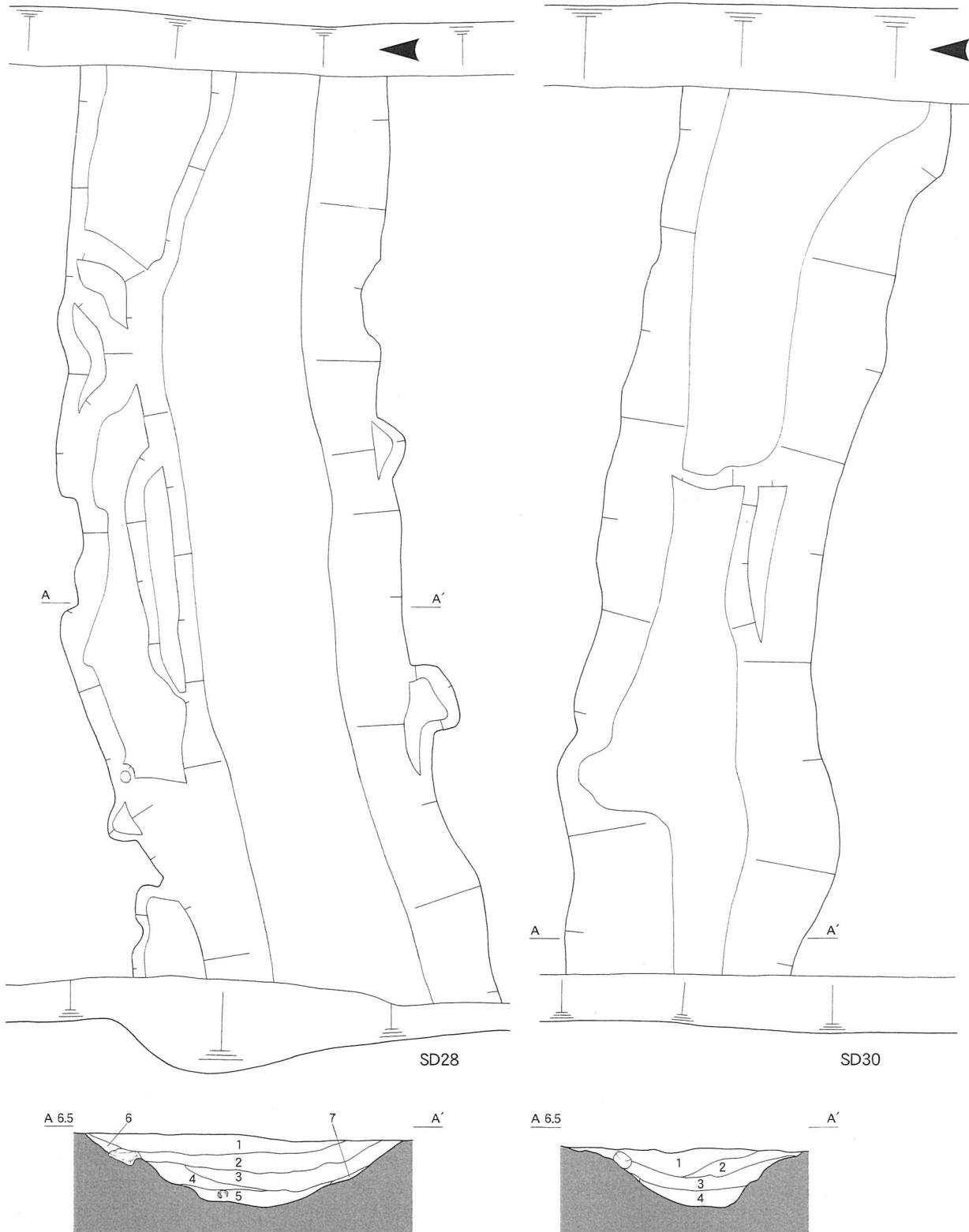
D区の南西方向から北東へ伸び、北方向に屈曲する溝である。規模は長さ30.8m、最大上幅1.58m、最大深度0.29mを測り、溝方向は、北方向に伸びるN-45°-Eと、北東方向に伸びるN-23°-Eであった。覆土は締まりの良い黒色粘質土で、他の遺構よりも粘性が強くなる。覆土からは土師器壺が出土した。D区からは中世の遺物が検出されなかった。



1. 10YR2/3 黒褐色 黄褐色粒子( $\phi 0.1\sim 0.3\text{cm}$ )多 ブロック( $\phi 1\text{cm}$ )多 シルト しまり良(擾乱土)  
 2. 2.5Y3/1 黒褐色 黄褐色粒子( $\phi 0.1\sim 0.3\text{cm}$ )少 ブロック( $\phi 1\text{cm}$ )少 粘性土 しまり良  
 3. 2.5Y3/2 黒褐色 黄褐色粒子( $\phi 0.1\sim 0.3\text{cm}$ )少 灰褐色ブロック( $\phi 0.5\text{cm}$ )少 粘性土 しまり良

1. 2.5Y5/2 暗灰黄 黒色ブロック( $\phi 1\sim 3\text{cm}$ )少  
 粘質土 しまり良  
 2. 2.5Y3/2 黒褐色 粘質土 しまり良 炭( $\phi 0.5\text{cm}$ )少  
 3. 2.5Y2/1 黒 粘質土 しまり良  
 4. 2.5Y3/1 黒褐色 粘質土 しまり良

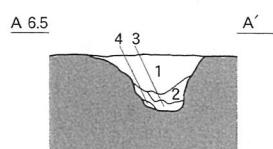
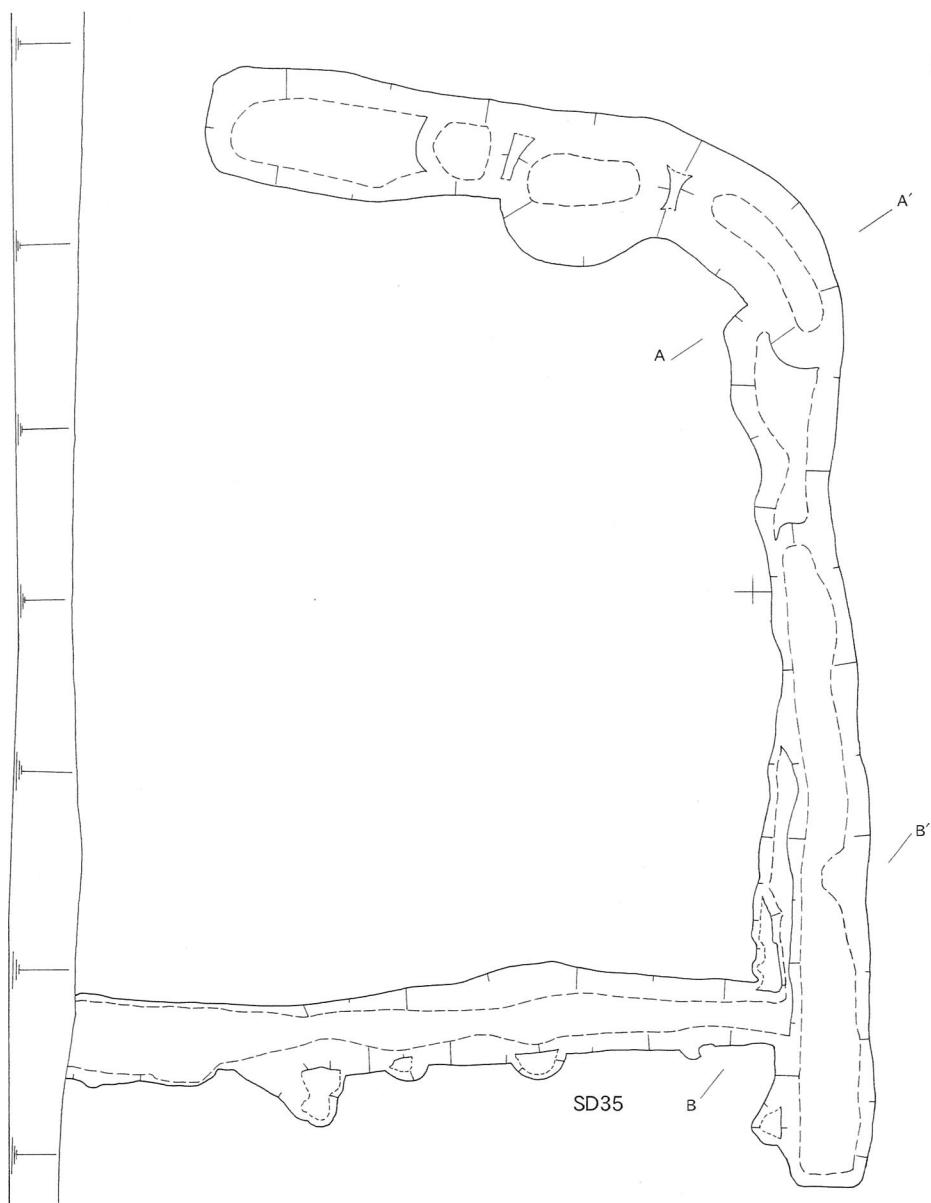
第11図 B区SD24・SD25遺構平面図及び土層図 (1/80)



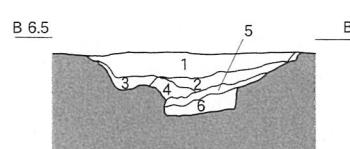
1. 2.5Y5/2 暗灰黄 灰褐色粒子( $\phi 0.1\sim0.3cm$ )少 黄褐色粒子( $\phi 0.1\sim0.3cm$ )多  
ブロック( $\phi 0.5\sim1.5cm$ )多 粘性土 しまり良
2. 2.5Y3/1 黒褐 灰褐色粒子( $\phi 0.1\sim0.3cm$ )多 粘性土 しまり良 磯を含む 遺物を含む
3. 5Y2/1 黒 灰褐色粒子( $\phi 0.1\sim0.3cm$ )多 ブロック( $\phi 0.5\sim1cm$ )多 粘性土 しまり良 炭化物含む
4. 5Y2/1 黒 灰褐色粒子( $\phi 0.1\sim0.3cm$ )多 ブロック( $\phi 0.5\sim1cm$ )多 3層より激しく混入
5. 5Y4/1 灰 灰褐色粒子( $\phi 0.1\sim0.3cm$ )多 ブロック( $\phi 0.5\sim1cm$ )少 炭化物含む 漆器楕含む
6. 5Y3/2 オリーブ黒 灰褐色粒子( $\phi 0.1\sim0.3cm$ )多 ブロック( $\phi 0.5\sim1cm$ )多 シルト
7. 5Y5/1 灰 シルト しまり不良(肩部崩落土) 3層土を含む

0 4m

第12図 B区SD28・SD30遺構平面図及び土層図 (1/80)



1. 2.5Y3/2 黒褐 粘質土 しまり良  
炭(φ~0.2cm)少  
2. 2.5Y3/1 黒褐 粘質土 しまり良  
炭(φ~0.2cm)少  
3. 2.5Y2/1 強粘質土 しまり良  
4. 2.5Y3/1 黒褐 強粘質土 しまり弱



1. 2.5Y3/2 黒褐 灰色粘質ブロック(φ1~2cm)少  
粘質土 しまり良 炭(φ0.5~1cm)少

2. 2.5Y3/2 黒褐 粘質土 しまり良

3. 2.5Y3/1 黒 白色シルトブロック(φ1~3cm)多  
粘質土 しまり良

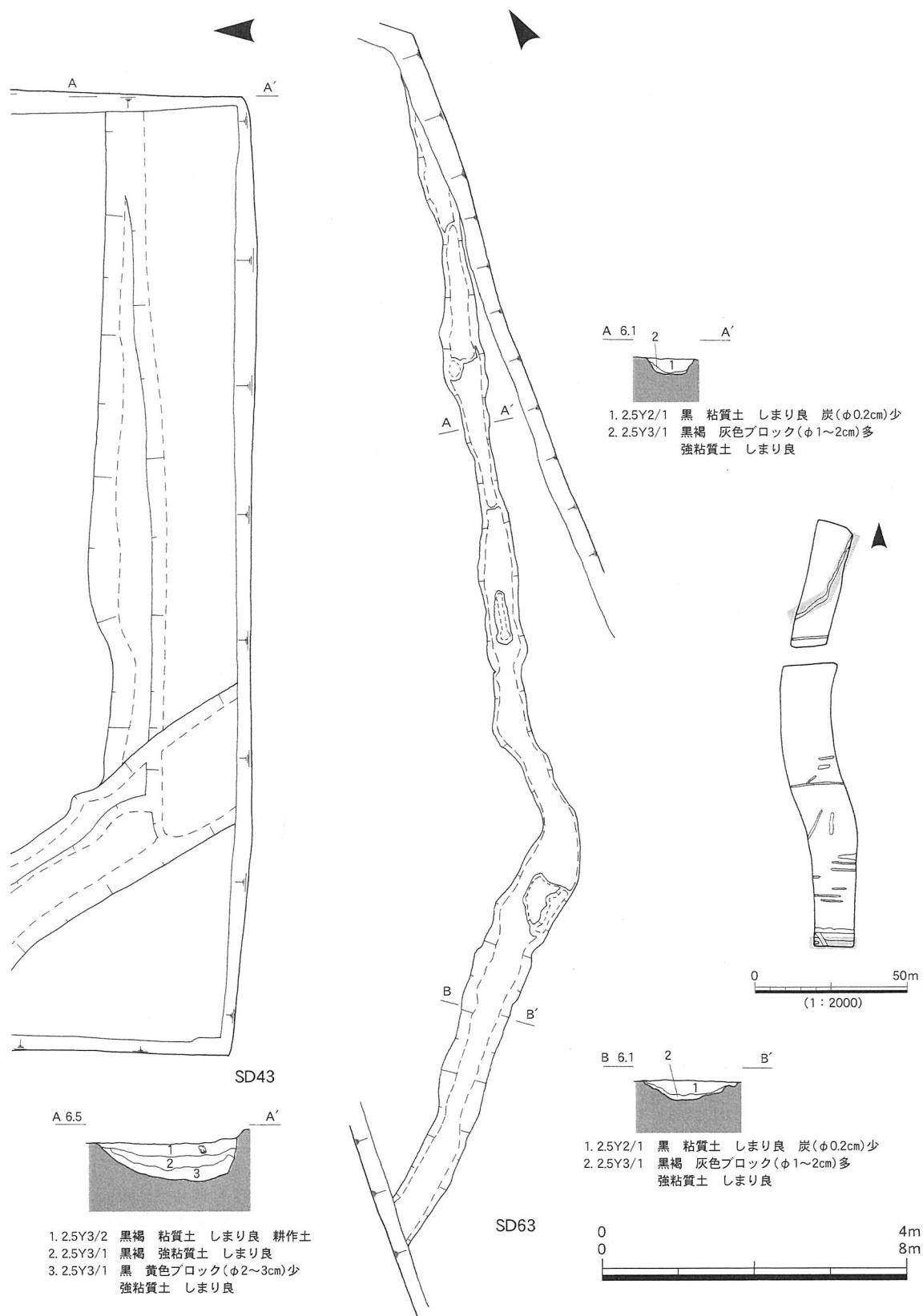
4. 2.5Y4/2 暗灰黄 白色シルトブロック(φ1~3cm)少  
粘質土 しまり良

5. 2.5Y3/1 黒 粘質土 しまり良 炭(φ0.5cm)少

6. 2.5Y3/1 黒 青灰色ブロック(φ5cm)少 強粘質土 しまり良



第13図 B区SD35遺構平面図及び土層図（1/80）



第14図 C区SD43・D区SD63位置図 (1/2000) と遺構平面図及び土層図 (1/80・SD63平面図は1/160)

#### 4 遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は、古墳時代から近世に至るものが確認された。中でも、中世に属するものが主体を成している。遺物の内容は、土師器・中世土師器皿・青磁・珠洲焼・越中瀬戸・瀬戸美濃・染付・越前・信楽・肥前系陶磁器・木製品・石製品・金属製品・古錢と多岐に渡る。以下に各遺構及び包含層から出土した遺物について記述する。

##### (1) 土坑

###### SK33 (第15図)

1～4は、中世土師器皿である。全て非口クロ成形で、口縁部には一段ナデを施し、底部外面は不調整にする。1は、口縁部に強い横ナデを施され、外反する。底部は丸底である。2・3の口縁部は弱く外反し、端部はやや尖る。底部は丸底を呈する。4は、口縁部が外傾しながら立ち上がり、やや内彎する。本土坑内から出土した中世土師器皿は宮田編年V期にあたり、15世紀後半～16世紀初めに比定される。

5は、珠洲焼擂鉢口縁部である。外傾する口縁部で端部は平坦になる。卸目の間隔は広い。吉岡編年IV期に比定されるものであろう。

6は、龍泉窯青磁碗である。口クロによる成形で、口縁部は弱く外反し、端部は丸味を帯びる。腰が張り、底部へ移行する。見込みには草花紋がスタンプされる。太宰府分類IV類に比定される資料である。

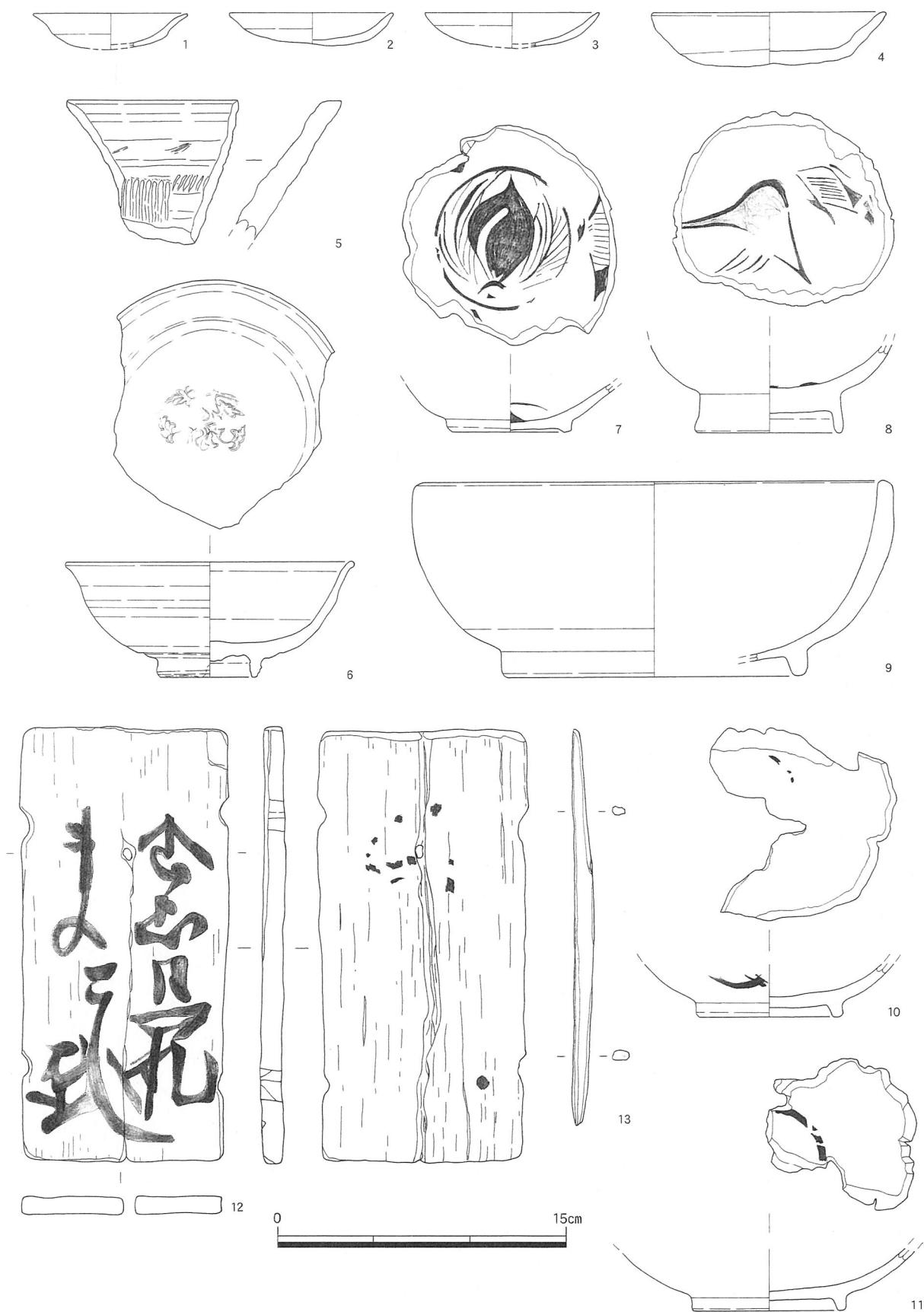
7～11は漆器である。7は低い高台を持ち、高台脇から開き気味に立ち上がる底部である。見込みには大きく草花紋が、その周囲には扇紋が描かれる。久々編年IIa期にあたり、15世紀～16世紀前葉に位置づけられる。8は、高い高台がやや外開きになる底部である。見込みには草花紋と扇紋が描かれる。9は無紋の大椀である。口縁から底部にかけての資料で、口径は23.8cmと大ぶりである。10は低い高台を持ち、高台脇から外に開く椀の底部である。内外器面には漆絵が僅かに確認できる。久々編年IIa期にあたり、15世紀～16世紀前葉に比定される。11は皿の底部である。低い高台を持ち、高台脇から外に開く。見込みに漆絵が確認できるが、絵柄は不明である。

12は木札である。先述した青磁碗の直上から出土した。寸法は、縦7.5cm、横3.6cm、厚さ0.4cmになる。上縁より1.5cm、下縁より1.5cmの左右縁に抉りが見られ、上縁より2.3cmの中央部分には小孔が穿かれている。紐を通して使用されていたのだろう。記されている文字は「□（金カ）山馬札 □（斗カ）□（花押）」であった。花押は、室町時代の武家様花押であり、足利将軍家の花押と類似性がある事から、番衆や奉行人といった、幕府関係者のものと推定される。近似した花押には、能登半島若山莊荘官の本庄氏が用いた花押が挙げられる。判読不能な文字もあるが、おそらく、馬を荷とした輸送行動に伴う荷札ではないかと考えられる。

13は、扁平な箸状木製品である。

遺構番号	挿図番号	種類	出土層	器種	法量 (cm)			紋様	写真番号		備考
					口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)				
SK33	15	中世土師器	皿	1	8.0		(1.9)		5	4	宮田編年V期
				2	8.5		1.7			6	
				3	9.0		(1.8)			5	
				4	12.2		2.8			7	
	珠洲	上・中層	擂鉢				7.2		7	6	吉岡編年IV期
										10	
	青磁	中層	椀	5	15.0	5.0	6.0	草花紋	2	1	木札の直下より出土・太宰府分類IV類
								草花紋			
	漆器	上層	椀	6		6.6	(2.5)		7	1	久々編年IIa期
						7.5	(4.5)	草花紋・鶴紋			
		中層	大椀	7	23.8	15.0	10.1	無			久々編年IIa期
						7.2	(2.7)	不明			
						7.6	(3.2)	○紋有			
	木札				7.5	3.6	0.4		2	2	「□山馬札 □□（花押）」の文字
					20.5	1.0	0.6			7	
	箸										

表1 SK33出土遺物一覧表



第15図 SK33出土遺物 (1~11・13は1/3、12は1/1)

## (2) 井戸

### SE1 (第16図)

14は、中世土師器皿である。非口クロ成形で、口縁部には一段ナデを施す。口縁部内外面には煤の付着が見られ、内面では厚くタール状になる。灯明皿として使用されたものであろう。底部外面は不調整で、丸底を呈する。宮田編年V期にあたり、15世紀後半～16世紀初めに比定される。

15は、木箱の蓋である。蓋と考えられる正方形形状の板材上面には、中央部に鳥の絵柄が線刻され、絵柄の上下左右には小孔が2孔ずつ、計8孔施される。蓋を被せた後、木釘で閉じた痕跡と考えられる。また、左側面にも木釘痕が2孔見られた。右側面の長方形形状の板材は、蓋部より打たれた木釘痕のほか、下側面にも木釘痕が1孔見られる。

16・17は、用途不明の部材である。16は、上部と下部に小孔が穿かれており、火を受けた痕跡が見られる。17は、Y字形の部材である。自然木の両端を斜めに加工し、先端を尖らさせている。

### SE4 (第16図、第17図)

18は、青磁盤口縁部である。口縁部はやや折縁状で、屈曲部の外面には沈線が見られる。口縁内面には草花紋が、体部内面には蓮弁紋が施される。太宰府分類III類に相当する。

19は、漆器小皿のほぼ完形品である。低く径の大きい高台を持ち、口縁部外面には、鑿状工具で一部面取りを行っている。見込みには、○紋が描かれ、その中に×紋が描かれる。16世紀後半に相当する。口縁外面に面取りを施す整形技法は、小倉中稻遺跡出土の漆器小皿にも見られる。

20～26は、石組み井戸に使用されていた石製品である。何らかの理由で本来の機能が失われ、石材として転用されたと考えられる。同図に示した資料は全て、雨晴海岸を産地とする砂岩であった。

20～22は、五輪塔火輪である。20は、軒部分の欠損が激しく、反りの様相は判然としないが、14世紀代のものと考えられる。21は、高さに比べ幅が広く、軒中央よりも軒先の幅が広い。軒下端が水平を呈す事から、14世紀末～15世紀初頭に相当する。22は、高さに比べ幅が広く、軒口を僅かに斜めに切り下げる特徴を持つ事から、15世紀代に比定できる。

23・24は、五輪塔水輪である。共に最大径が胴上部に位置し、壺形になる。23は、正面に梵字「唵(バン)」が刻印される。両遺物とも、14世紀後半頃に相当する。

25は、宝篋印塔である。方立の外辺が欠損しているため、時期を比定するには至らなかった。

26は、板状に加工された製品である。梵字等は見られなかったが、石塔の類であると考えられる。

### SE7 (第18図)

27は、非口クロ成形の中世土師器皿である。口縁部は一段横ナデを施し、底部内面はナデ、外面は不調整にする。内外面には、煤の痕跡が見られる。宮田編年IV期にあたり、15世紀後半～16世紀初めに比定される。

28・29は、箸状木製品である。28は断面形状が円形に近く、29は扁平になる。

### SE8 (第18図)

30は、中世土師器大皿である。非口クロ成形で、外反する口縁部には、横ナデが施される。口縁内面と体部外面には、強い横ナデにより稜が形成される。宮田編年V期にあたり、15世紀後半～16世紀初めに比定される。

31は、口縁部を欠く漆器椀である。低い高台と厚みのある底部を持ち、口縁部に向かって内彎しながら立ち上がる。見込みと外面には、扇紋と草花紋を描き、扇紋には引搔き技法が用いられる。久々編年II b期にあたり、16世紀中葉に相当する。

### SE15 (第18図)

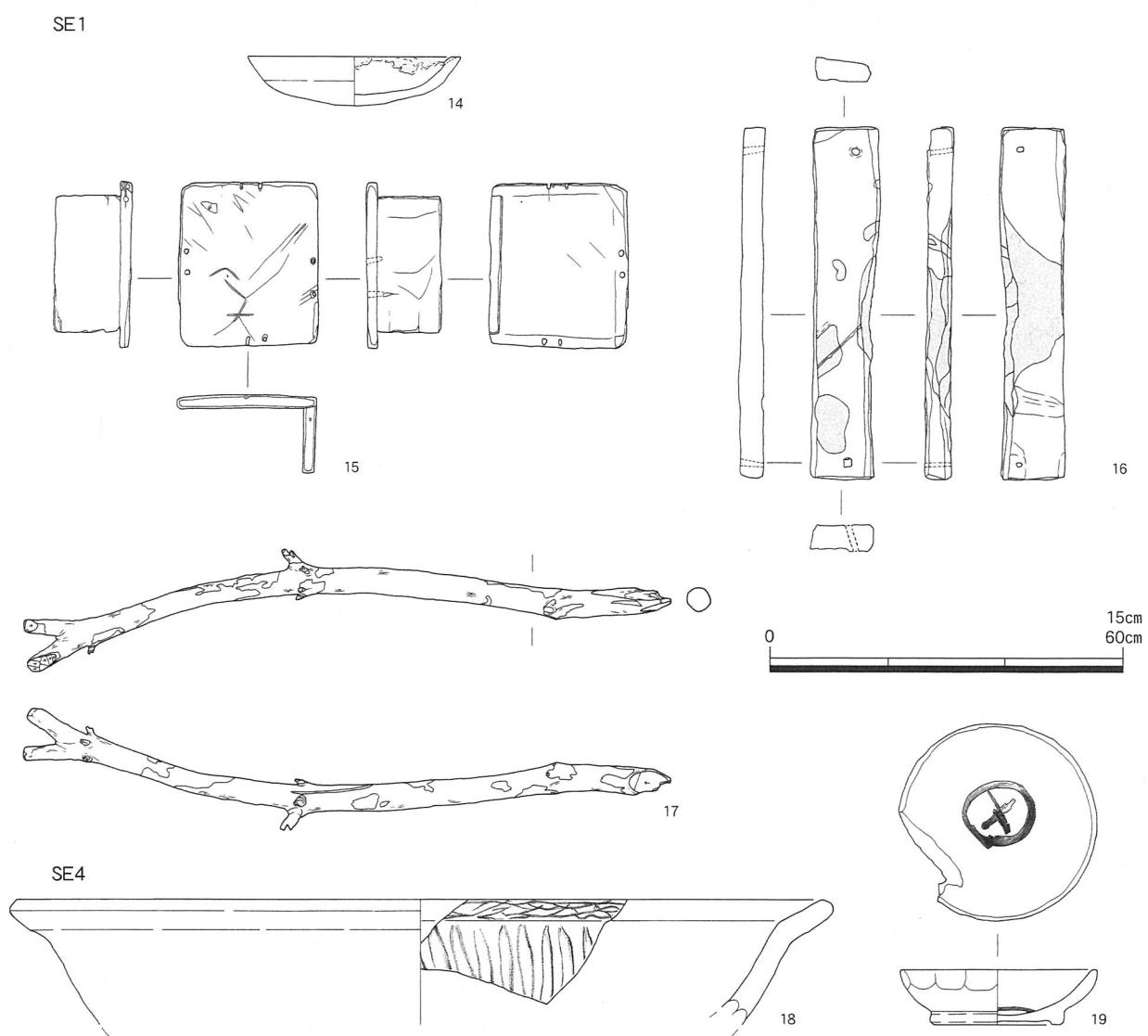
32は、井戸底から出土した曲物である。法量は、長軸47.8cm、短軸36.1cm、高さ15.5cmを測り、平面形状は小判形を

呈する。内面ケビキを施す側板は、2重構造になり互いの打合せは180° 反対の箇所で設けられ、側板が外れにくい作りとなっている。綴じ合わせは1箇所で、樺皮が使用される。本綴じ部分は、1列内2段綴じになる。上端の上下縁にはキメカキを施す。

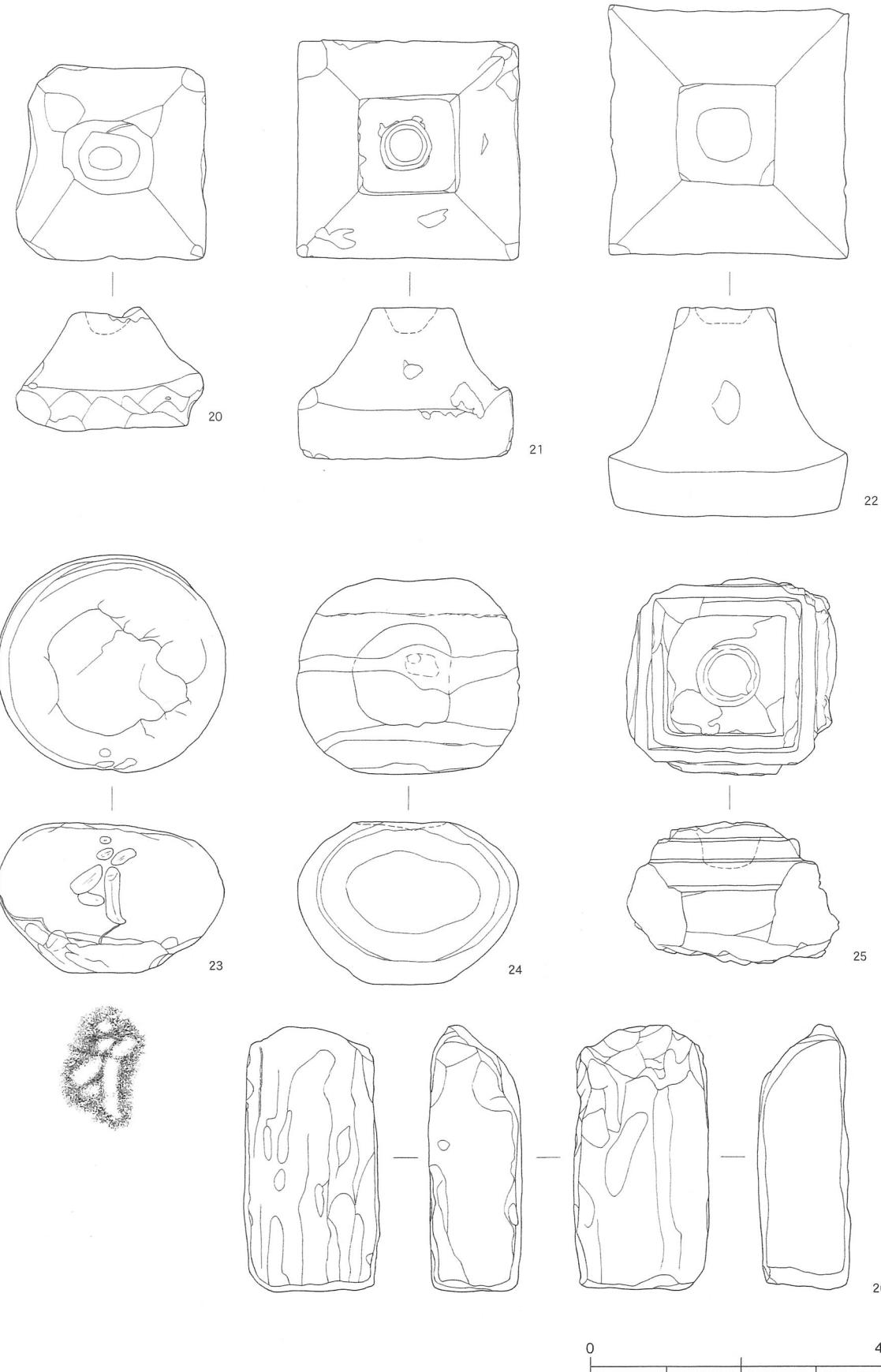
33は、刀子である。刀身先端及び茎端部は欠損している。

#### SE16 (第18図)

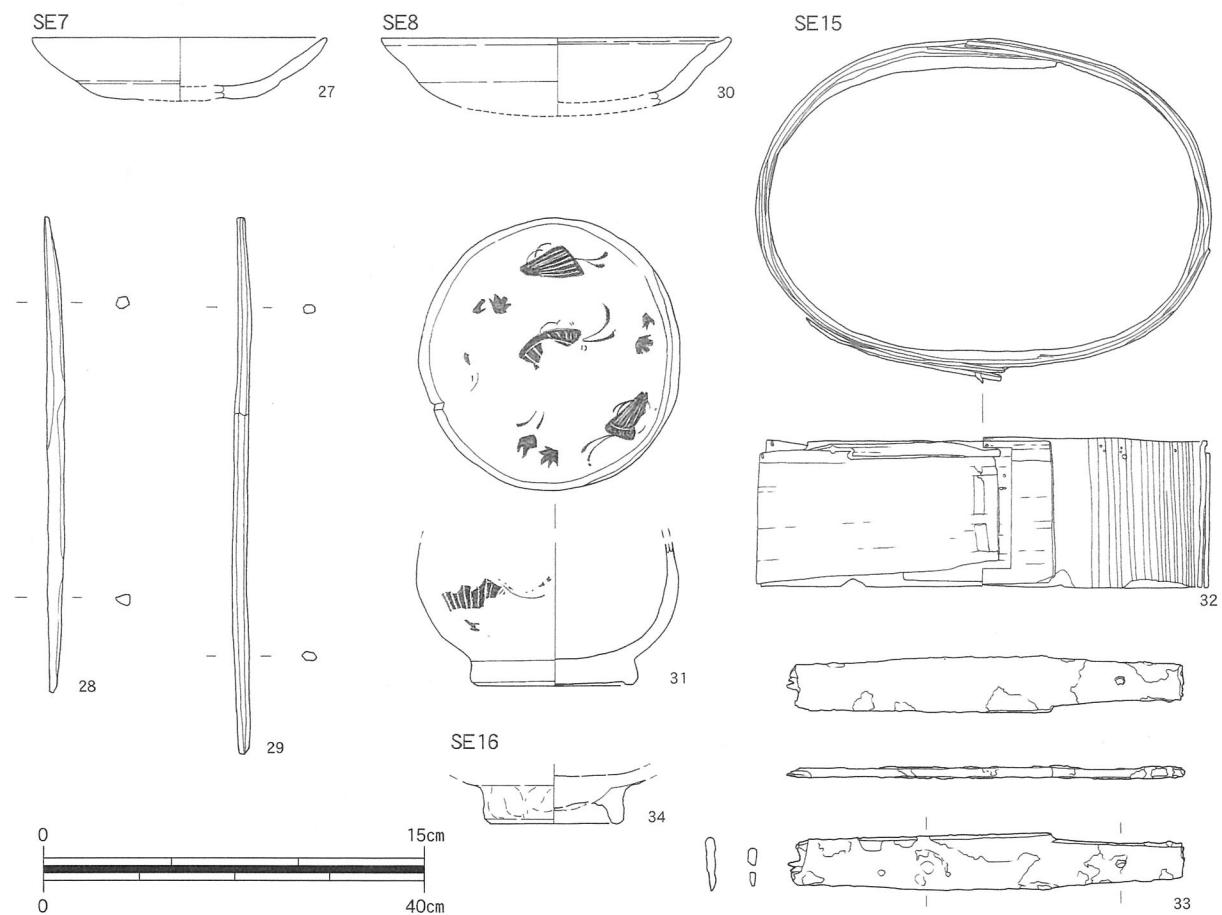
34は、龍泉窯系青磁碗底部である。ロクロによる成形と、高台削り出しが行われている。太宰府分類のⅢ類に相当する。



第16図 SE1・SE4出土遺物 (14~16・18・19は1/3、17は1/12)



第17図 SE4出土石製品 (1/8)



第18図 SE7・SE8・SE15・SE16出土遺物 (27~31・33・34は1/3、32は1/8)

遺構番号	挿図番号	種類	出土層	器種	法量(cm)			紋様	図版番号		備考
					口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)				
SE1	16	14 中世土師器		皿	9.0		2.1		5	1	宮田編年V期
		15 木箱		蓋	6.9	5.9	0.6	鳥絵柄	2	3	鳥の模様を線刻
		16 部材			15.1	3.1	1.2		8	13	火を受けた痕有
		17			107.5	4.3	4.0		12		
SE4	17	18 青磁		盤	35.4		(5.3)	草花紋・蓮弁紋	2	4	太宰府分類Ⅲ類
		19 漆器	下層	皿	8.4	5.6	2.4	○紋・×紋	7	2	16世紀後半
		20	五輪塔		10.3	24.6	15.7		11		14世紀代
		21			10.9	28.9	19.9		12		14世紀末～15世紀初頭
		22			12.9	31.6	27.9		13		15世紀代
		23	水輪		32.0		19.9	梵字「パン」	9	17	14世紀後半頃
		24			29.6		21.5		16		14世紀後半頃
		25 宝篋印塔		笠	18.3	26.8	25.2		18		
		26 石塔？			35.1	17.8	12.3		19		
SE7	18	27 中世土師器		皿	11.6		(2.5)		5	2	16世紀中～後半
		28 木製品	中層	箸	18.6		0.7		8		
		29			20.9		0.6		8		
SE8	18	30 中世土師器		大皿	13.6		(3.1)		5	3	宮田編年V期
		31 漆器	上層	椀		6.1	(5.6)	扇紋・草花紋	7	3	久々編年II b期
SE15		32 曲物	下層		47.8	36.1	15.5		8	3	
		33 刀子			15.7	2.1	0.4		10	17	
SE16		34 青磁		碗		5.4	(1.8)		5	24	太宰府分類Ⅲ類

表2 SE出土遺物一覧表

### (3) 溝

#### SD9 (第19図)

35・36は、珠洲焼である。35は、擂鉢口縁部で、肥厚した口縁部は内側に弱く内斜し面を設け、櫛目波状文が施される。吉岡編年IV期に比定される。36は、甕底部である。底部裏には、静止糸切りの痕が残る。吉岡編年IV～V期に相当する。

#### SD16 (第20図、第21図)

39～41は、中世土師器皿である。全て非ロクロ成形で、口縁部には、一段横ナデを施す。39は、特に強いナデが行われている為、体部に稜が形成され、口縁部が外反する形状となる。底部は全て丸底である。宮田編年VI期にあたり、16世紀代に比定される。

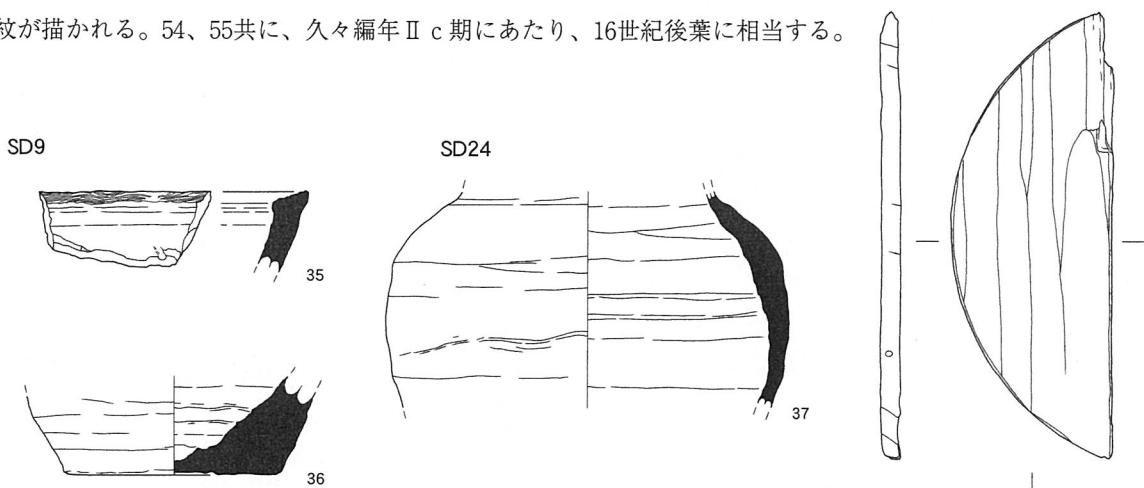
42は、龍泉窯系青磁碗の口縁部である。口縁部はやや外反し、端部は丸味を帯びる。太宰府分類III類、若しくはIV類にあたる。

43は、瀬戸美濃香炉である。袴腰形を呈する底部は、回転糸切りの痕が見られ、後支脚が貼付される。藤沢編年古瀬戸後III～IV期（古）にあたる。

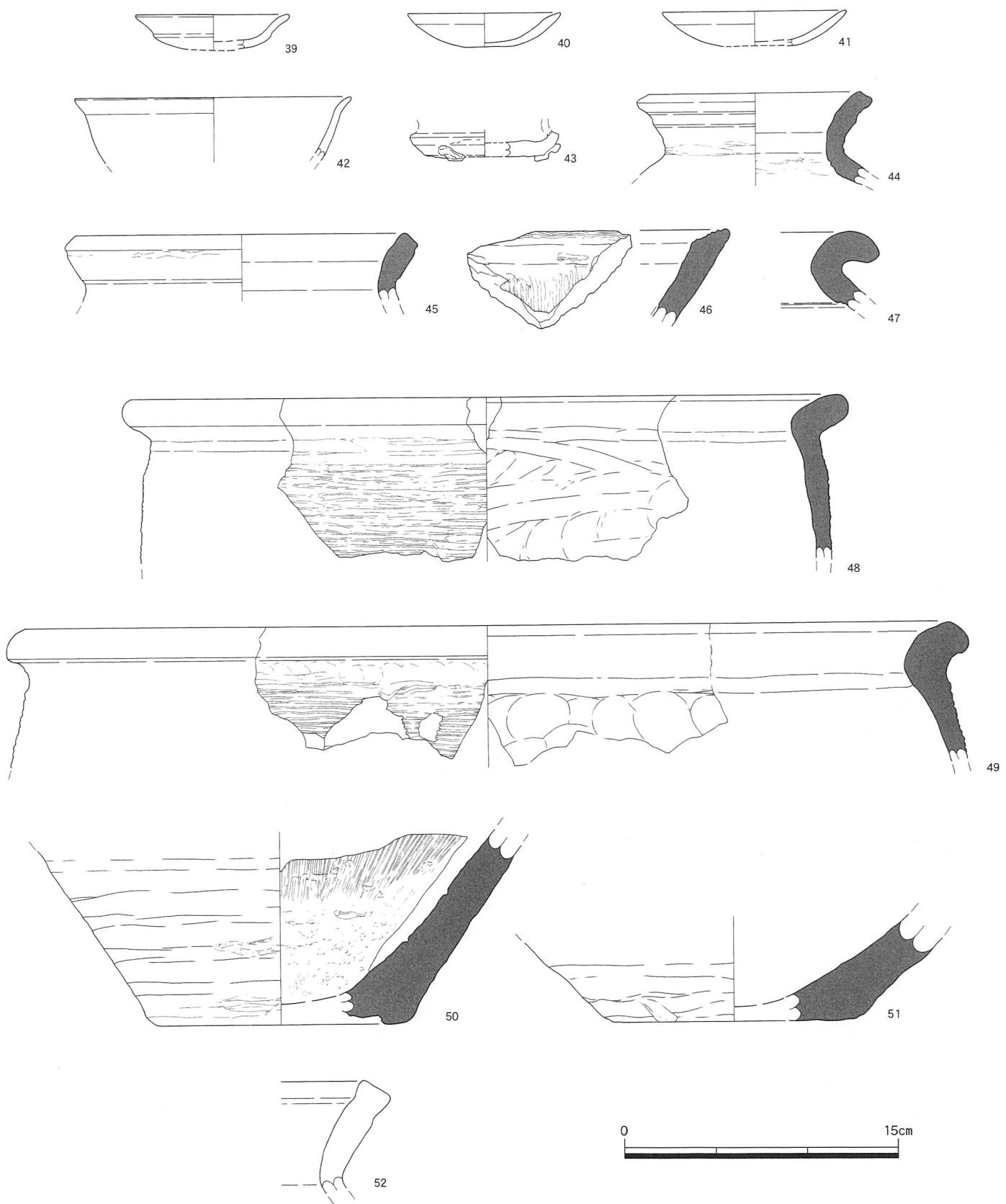
44～51は、珠洲焼である。44・45は壺口縁部で、44は、肥厚外反する口縁部を持ち、頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁端部は平坦で、挽き出しが弱い。吉岡編年V期にあたる。45は、やや外反し、頸部の屈曲は弱い。口縁端部は平坦で、挽き出しが行われない。吉岡編年V期にあたる。46は、擂鉢口縁部である。口縁部は若干肥厚し、口縁内側には面を設け、櫛目波状文を施す。吉岡編年V期にあたる。47～49は、甕口縁部である。47は、頸部で強く屈曲し、口縁端部は丸味を帯びる。吉岡編年III期に比定できる。48は、口縁部が円頭状を呈し、頸部の屈曲は弱く、肩が張らず直線的に胴部へ移行する。吉岡編年IV期後半～V期に相当する。49は、肥厚する口縁部を持ち、端部は丸味を帯びる。頸部の屈曲は弱く、口縁部と体部の区別が不明瞭になる。吉岡編年V～VI期に比定できる。50、51は、擂鉢底部である。50の立ち上がりはきつく、卸目は密に施される。吉岡編年V期に比定できる。51は、緩く立ち上がり、底外面の切り離しは、静止糸切りが用いられる。内面には煤が付着している。

52は、越前甕口縁部である。口縁部はやや肥厚し、端部は平坦になる。頸部の屈曲は弱い。外面には、自然釉が掛かる。16世紀代に相当する資料である。

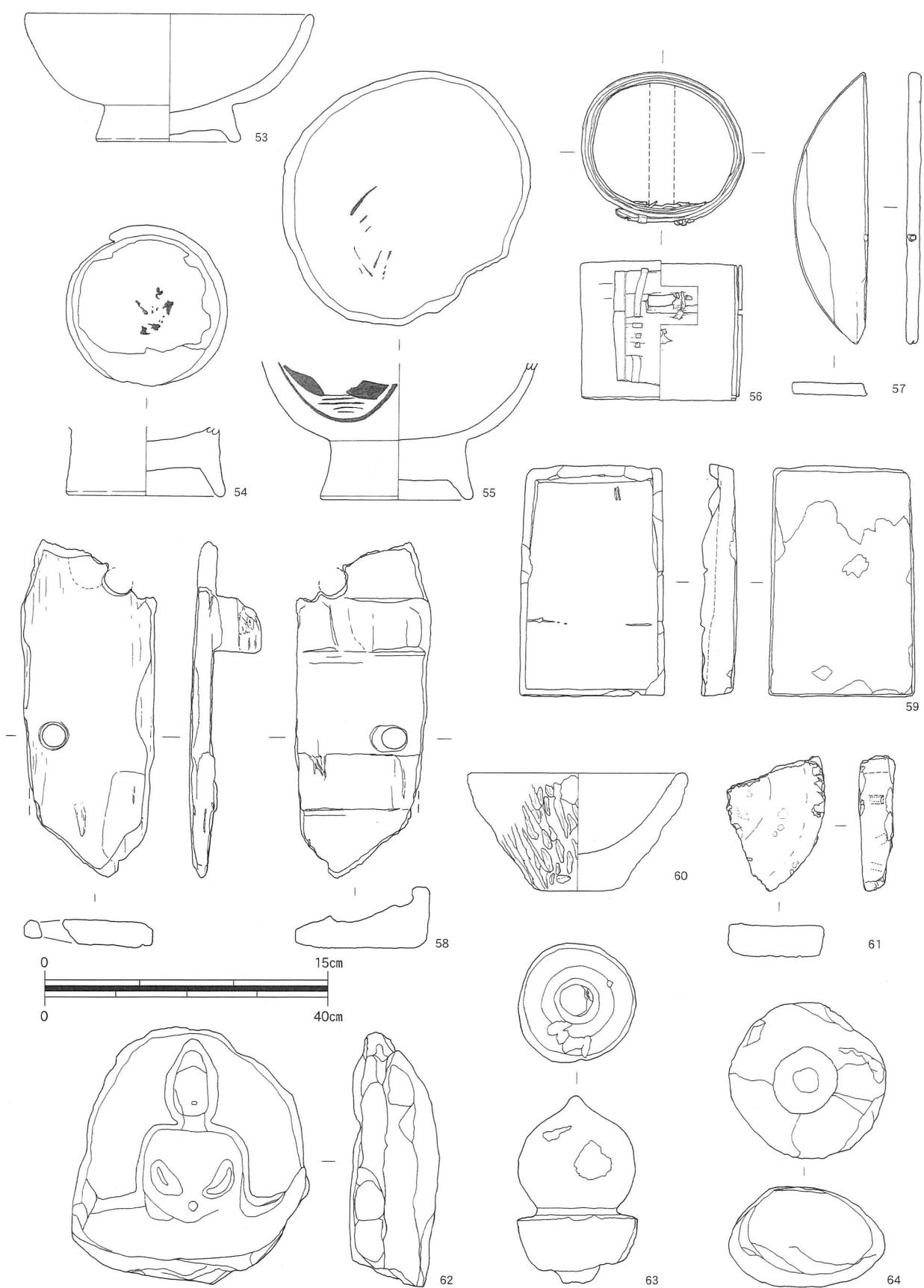
53～55は、漆器椀である。53は、やや高目の高台と厚い底部を持つ、高台は「ハ」の字状に開く。腰は張らず、半球状になる。漆絵は認められなかった。久々編年IIa期にあたり、15世紀～16世紀前葉に比定される。54、55は、椀の底部である。「ハ」の字状に開く高い高台と、厚い底部を持つ。見込みには、漆絵が僅かに残る。55は外面に○紋の中に草花紋が描かれる。54、55共に、久々編年IIc期にあたり、16世紀後葉に相当する。



第19図 SD9・SD16出土遺物 (1/3)



第20図 SD16出土土器 (1/3)



第21図 SD16出土木製品及び石製品 (53~59は1/3、60~64は1/8)

56は、柄杓の身である。円形曲物に、棒状の柄を取り付けていたもので、柄は残存しない。側板には、柄を通す為の方形孔が穿かれている。本綴じ部分は1列外5段綴じで、上端部分には、綴じ皮を通す穴による木目の割裂を防ぐ為の、外面ケビキが施される。方形孔の右側にある小綴じは、1列内1段綴じである。上端の上下縁にはキメカキが施される。

57は、円形板である。木釘孔が1箇所見られる。本来は複数の板材と結合していたと考えられる。

58は、連歯下駄である。前壺の一部と右後壺、後歯を欠損する。右足用と考えられる。

59は、硯である。平面形状は長方形を呈し、裏面は平坦で、海部を鈍角に削って作り出している。内面及び周囲には墨痕が残る。側面、裏面には擦痕が見られ、砥石に転用された事が窺える。

60は、砂岩製の石鉢である。底部は厚く、立ち上がりは強い。外面にはノミの痕が残る。

61は、凝灰角礫岩製挽臼の下臼で、全体の1/4程度残存する。中心部分はやや盛り上がり、軸穴も僅かに見られる。摺面は磨滅が著しく、溝は不明瞭になる。外周にはノミによる加工痕が見られる。素材である凝灰角礫岩は、南砺市鍬先山を産地とする、通称桑山石と呼ばれるものである。

62は、氷見産砂岩製の一石一尊仏である。彫像は、阿弥陀如来像で、膝の上で定印を組む。平面形状は丸く、底部はやや平坦で、全体的に肉薄である。脚下部と蓮華座の境は不明瞭である。14世紀後半～15世紀初頭のものと考えられる。

63は、氷見産砂岩製の五輪塔空風輪である。空輪頂部は尖り、欠首は無い。風輪上部は平坦になる。柄の下部は欠損するが、円柱状を呈するものと考えられる。15世紀前半頃に相当する。

64は、氷見産砂岩製の五輪塔水輪である。最大径が胴中央部に位置し、側面の形状は算盤玉形になる。15世紀～16世紀にかけてのものと考えられる。

#### SD22（第22図）

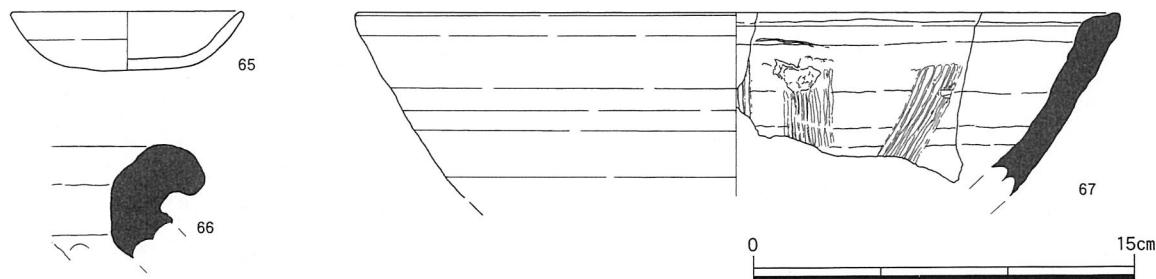
65は、中世土師器皿である。非口クロ成形で、口縁部には一段横ナデが施される。口縁部は直線的に外傾し、端部はやや尖る。底部は、平底に近い丸底を呈する。内外面とも煤の付着が見られ、灯明皿として使用された事が窺える。

66・67は、珠洲焼である。66は、甕口縁部で方頭状を呈し、頸部の屈曲が強い。吉岡編年Ⅲ期に相当する。67は、擂鉢口縁部である。卸目の間隔が広く古式の様相を呈するが、若干肥厚する口縁部や、口縁内側に面を形成する特徴等から、吉岡編年Ⅴ期にあたるものと考えられる。

#### SD24（第19図）

37は、珠洲焼壺胴部である。肩は張らず、胴部へ緩やかに移行する。吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期頃のものか。

38は、円形板である。外周は丁寧に加工され、木釘痕が見られる。曲物の側板と結合されていたと考えられる。



第22図 SD22出土遺物（1/3）

#### SD25（第23図、第26図）

68・69は、中世土師器皿である。非口クロ成形で、口縁部には一段横ナデを施す。68は、強いナデの為、口縁内面に稜を形成し、底部にかけてやや器厚が厚くなる。69は、口縁端部が細くなる。両遺物とも、口縁端部に煤が付着している。灯明皿として使用されたものであろう。共に底部は丸底になる。宮田編年VI期にあたり、16世紀前半～末に比定される。

70は、珠洲焼甕口縁部である。口縁部は円頭状を呈し、頸部は「く」の字状に屈曲する。肩は張らず、直線的に胴部に移行する。吉岡編年V期に相当する。

112は、氷見産砂岩製挽臼の上臼である。全体の3/5程度残存している。物配り穴は半分欠損するが、円形である事が窺える。受け皿の窪みは浅い。摺面は磨滅が激しく、主溝、副溝共に不明瞭である。軸穴は浅く丸形になり、挽手穴は方形を呈する。

113は、泥岩製砥石で、中砥・仕上砥に使用されたものと考えられる。断面形状は板状を呈す。

#### SD28（第23図、第24図、第25図、第26図）

71は、中世土師器皿である。非口クロ成形で、口縁部には一段横ナデを施し、外面に稜を形成する。底部は丸底である。

72は、龍泉窯系青磁香炉の底部である。無文で筒形の器形に、脚を3つ貼付ける。

73～76は珠洲焼である。73・74は、甕口縁部で方頭状を呈し、「く」の字状に屈曲する頸部を持つ。74は、73に比べ口縁部が短くやや丸味を帯びる為、73よりも新しい様相を呈す。いずれも吉岡編年IV～V期の範疇に収まる。

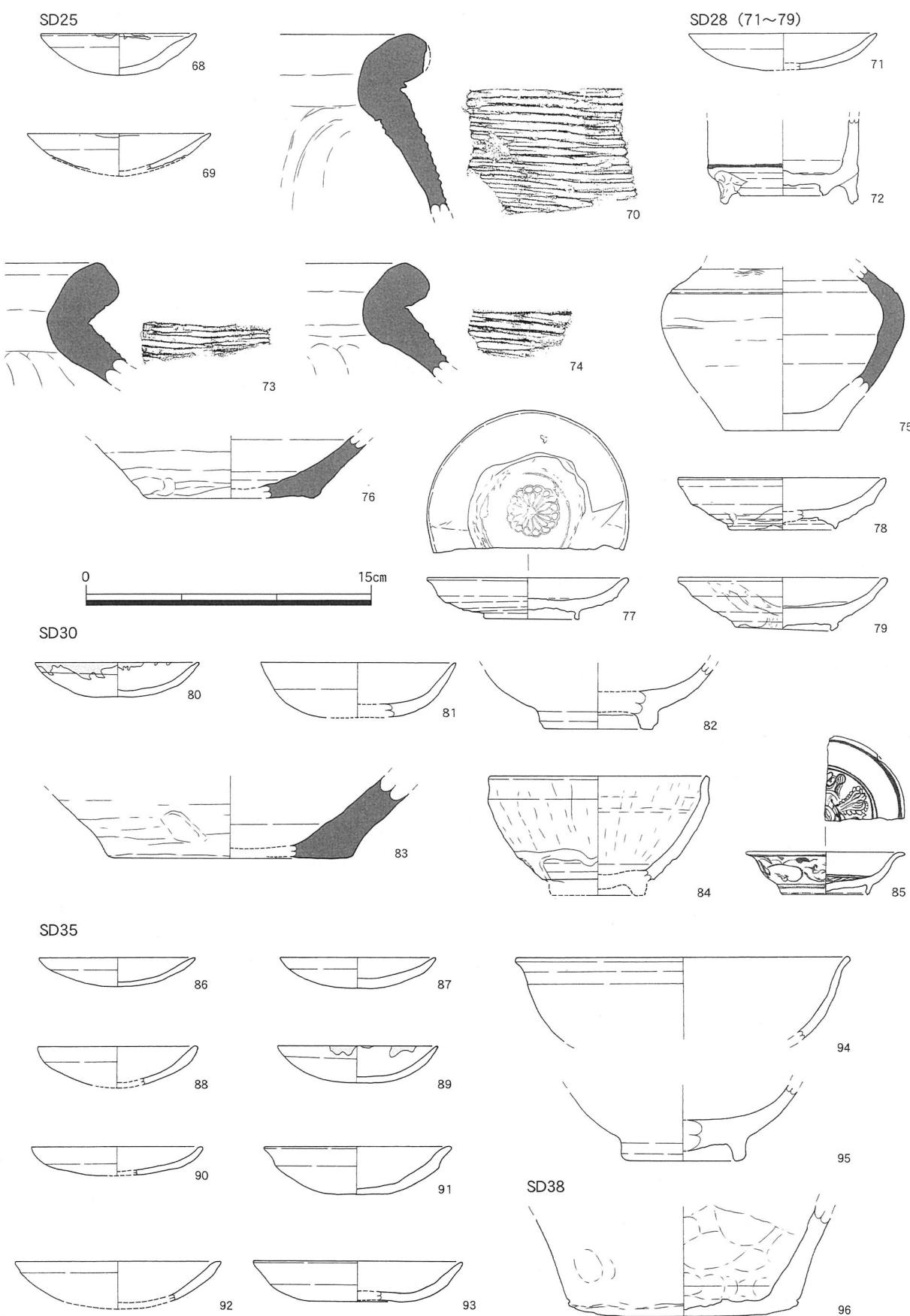
75は、壺胴部で、肩は頸部よりやや下がった箇所で強く張り出す。器高は低く、肩部外面に櫛目波状文が見られる。吉岡編年IV期に相当するものと考えられる。76は、擂鉢底部で直線的に外に開く。底部には静止糸切り痕が残る。内面全体が磨滅し、器壁は薄く卸目は見られない。

77～79は、越中瀬戸小皿である。全て口クロによる成形で、外面下半には回転ヘラ削りを施す。77は、完形に近い資料である。内面は、横ナデにより整形される。見込みは釉拭い後、菊花紋がスタンプされる。菊花紋の周囲には、重ね焼き痕が残る。78は、ツケ掛けによる施釉で、釉薬は厚く貫入が見られる。高台は三角形状に削りだす。79は、見込みに釉拭いと重ね焼きの痕が見られる。出土した越中瀬戸は、16世紀後半～17世紀初頭に比定される。78、79は、本遺構の最下層より出土した。

97～101は、漆器である。97は、底部が欠損する椀である。内外面には草花紋が描かれる。98は、完形に近い椀である。低い高台を持ち、やや直線的に立ち上がる。見込み中央部には、○紋の中に四菱紋が3つ描かれ、それを取り囲むように、扇紋が入った○紋が3方に描かれる。見込みの紋様は、幕府直臣である武田下条氏が用いたとされる松皮菱紋が意匠されるが、本遺構が機能していた16世紀代には、武田下条氏の勢力は富山県内から消滅しており、直接的な関係があるというよりも、一つの紋様帶として使用されていたものと考えられる。久々編年II b期にあたり、16世紀中葉に比定される。99は、口縁部が欠損する椀である。高台は総高台で低く、腰は張らず直線的に立ち上がる。見込みには、俵紋が描かれる。外面にも漆絵が見られるが、詳細は不明である。高台裏には、「大」の文字が線刻される。久々編年II b期にあたり、16世紀中葉に比定される。100は、底部のみの資料である。高い高台が「ハ」の字状に開き、底部は厚く、見込みには漆絵が僅かに見られる。久々編年のII c期にあたり、16世紀後葉に比定される。101は、口縁部が欠損する椀である。高台は高く「ハ」の字状で、外に張り出す形を呈する。見込みには、圈線状の漆絵が描かれるが、残存部分が少ないため詳細は不明である。久々編年II c期にあたり、16世紀後葉に比定される。

107は、円形板である。外周は丁寧に面取りされる。

113は、挽臼の下臼である。全体の1/3程度残存する。摺面中心部分は盛上がり、外周に向かい低くなる。摺面は



第23図 SD25・SD28・SD30・SD35出土土器 (1/3)

磨滅しているが、1区画7条の副溝が確認できた。軸穴は貫通し、上部は「U」字状を呈し、下部は「八」の字状に広がる。

114は、五輪塔火輪である。上部が欠損し、縦横の比率は不明である。軒は真反りで、古式の様相を呈する。

115は、一石一尊仏である。上部は欠損するが、本来は舟形を呈していたものと思われる。彫像は、阿弥陀如来と思われ、膝の上で定印を組んでいる。脚下部と蓮華座の境は不明瞭になる。右肩と首周りにはノミによる加工痕が見られる。全体的に肉薄の作りである。14世紀後半～15世紀初頭のものと考えられる。本遺構から出土した石製品は、全て氷見産の砂岩であった。

#### SD30（第23図、第24図、第25図、第26図）

80・81は、中世土師器皿である。共に非口クロ成形で、口縁部には一段横ナデを施す。80は、口縁部の内外面に煤が付着する。灯明皿として使用されたものと考えられる。81は、器高が2.9cmと、やや深くなる。両遺物とも、底部は平底に近い丸底を呈する。宮田編年VI期にあたり、16世紀前半～末に比定される。

82は、龍泉窯系青磁碗の底部である。ロクロによる成形で高台は削り出しが行われる。太宰府分類II類に相当する。

83は、珠洲焼擂鉢底部である。底外面の切り離しは、静止糸切りが用いられる。内面には煤の付着が見られ、卸目は磨滅している。吉岡編年VI～VII期にあたるものと考えられる。

84は、底部を欠く瀬戸美濃天目茶碗である。ロクロによる成形で、外面下部は回転ヘラ削りが施される。口縁部は直線的に立ち上がるが、外面を押さえることによって、若干内に入る。内外面とも鉄釉が施釉され、外面は底部付近で露胎を呈する。藤沢編年古瀬戸後III期にあたる。

85は、漳州窯系染付小皿である。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は端反りする。見込みには宝相華紋、外面には唐草紋が、呉須により描かれる。小野分類IX類（B<sub>2</sub>群）に相当する。

102～106は、漆器である。102は、やや高い高台で、厚みのある底部である。見込みには、紋様が描かれた痕跡が残るが、絵柄は不明。久々編年のIIc期にあたり、16世紀後葉に比定される。103は、椀底部である。低い高台で腰は張らず、直線的に立ち上がる。見込みには井筒紋、外面には草花紋が描かれる。久々編年のIId期にあたる。104は、完形に近い椀である。高い高台が外に張り出す形を呈し、厚みのある底部になる。体部は内彎しながら口縁部へ移行し、身は深くなる。見込みには、小形の扇紋が1つ描かれる。外面にも扇紋が見られるが、見込みほど明瞭ではない。底部裏には、「一」の文字を意識したと思われる横線が描かれる。久々編年IIc期にあたる。16世紀後葉に比定され、当該期の代表的な器形を呈する。105は、高い高台が「ハ」の字状に開く底部である。見込みには草花紋が描かれる。久々編年のIIc期にあたり、16世紀後葉に比定される。106は、椀底部である。高台は低く、体部へやや直線的に立ち上がる。見込みには秋草紋が描かれる。久々編年IId期にあたり、16世紀中葉に比定される。

108は、柄杓である。僅かに残る側板と、底板から成る。側板は2重構造で、小綴じ部分に綴じ皮が見られるが、打合せ全体の様相は判然としない。

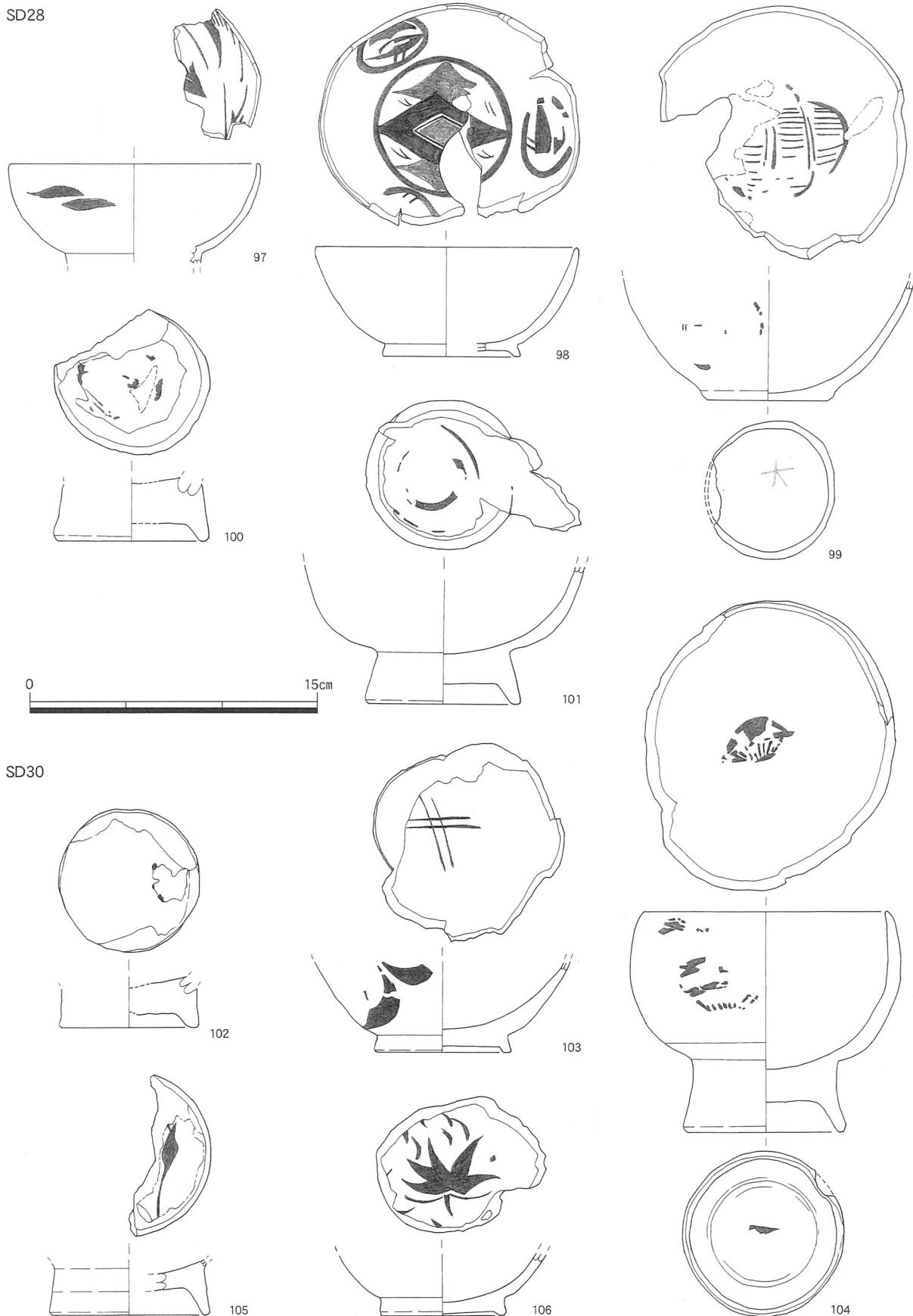
109は、連歯下駄である。前後の壺間に左右から挟りが入り、撥状になる。前壺の一部と、後壺、後歯が欠損する。台裏には、歯を削りだした際のノミ痕が線状に残る。前壺右部分に見られる指圧痕から、左足用のものと考えられる。

110は、豎杵である。1本木から作り出したもので、両先端部は使用により磨耗している。側位部分には、整形時の際にいた加工痕のほか、刃先痕が見られる事から、何らかの作業台として使用された事が窺える。

116は、氷見産砂岩製の五輪塔空風輪である。空輪頂部は尖り、欠首が立つ。柄は円柱状を呈する。14世紀中頃～後半のものと考えられる。

117は、安山岩製の砥石である。今回出土した砥石の中で最も大きく、荒砥用のものと考えられる。

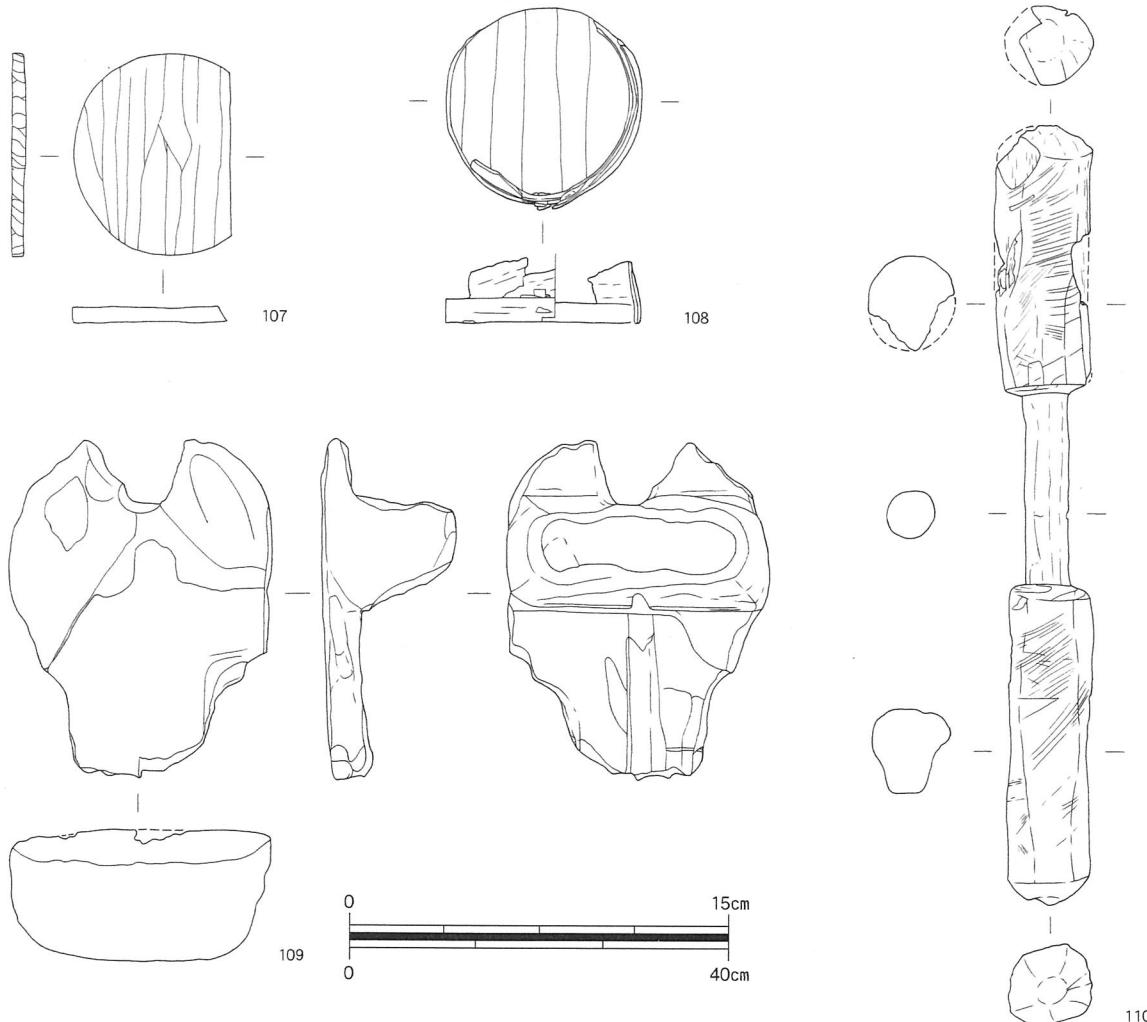
118は、用途不明の鉄製品である。



第24図 SD28・SD30出土漆器椀 (1/3)

SD28

SD30



第25図 SD28・SD30出土木製品 (107~109は1/3、110は1/8)

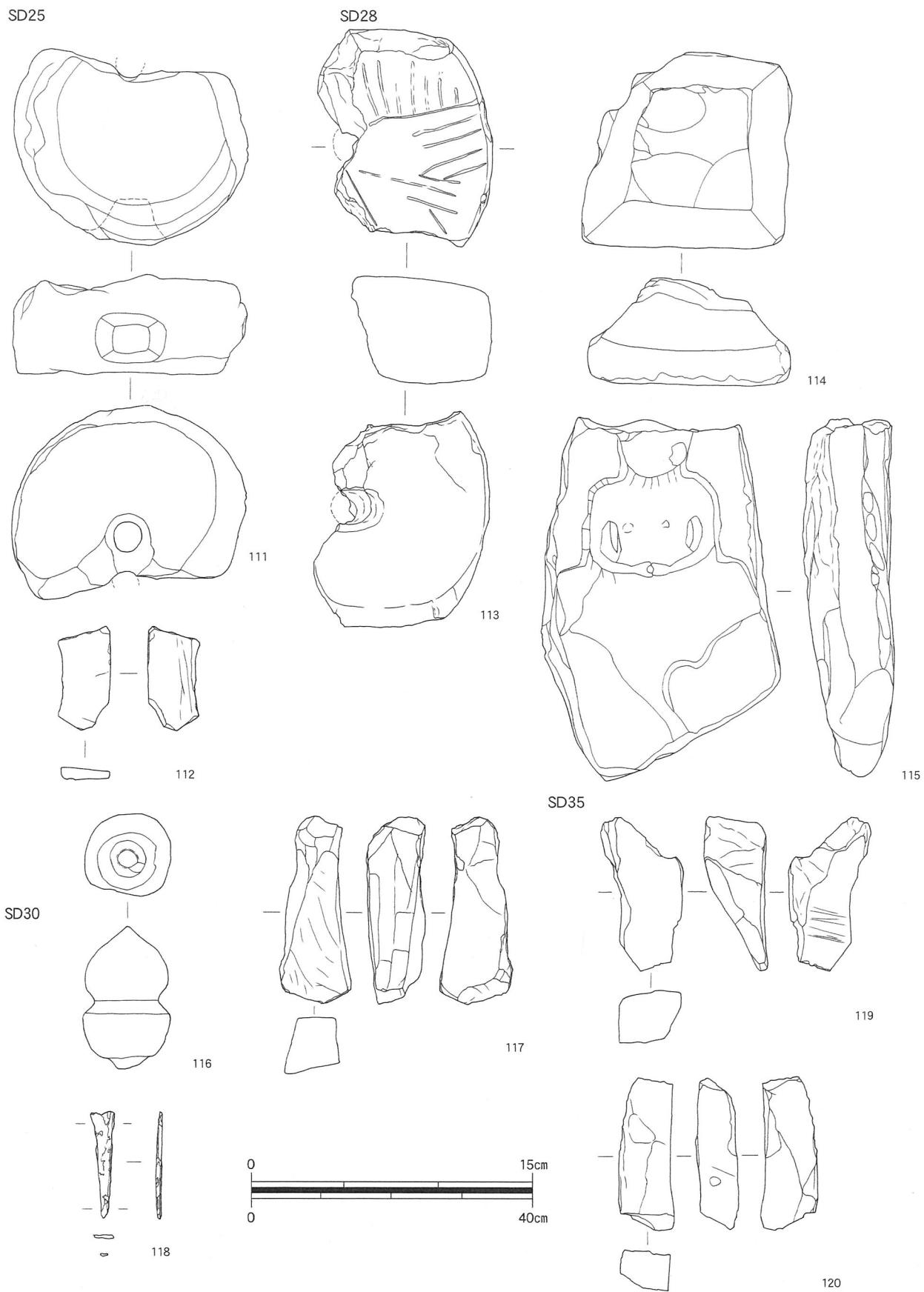
## SD35（第23図、第26図）

86~93は、南側の溝内から出土した中世土師器皿である。全て非口クロ成形で、口縁部には一段横ナデを施す。91・92は、強い横ナデにより口縁部が外曲し、外面に明瞭な稜を形成する。86~89は、口径が9cm以下と小さく、90~93はそれよりもやや大きい中皿となる。口縁部の形状により、内彎するもの（87~90）、直線的であるもの（86・93）、外反するもの（91・92）に分けられる。底部は93が平底を呈し、その他は丸底となる。89は、口縁部内外面に煤の付着が見られる事から、灯明皿として使用されたものと考えられる。本遺構より出土した中世土師器皿は、宮田編年VI期に収まるものと考えられる。16世紀代に比定される。

94は、南側の溝から出土した青磁碗口縁部である。口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさめる。口縁部から緩やかに屈曲し、底部へと移行する。器壁は3~4mmと薄く、残存部分ではほぼ一定を保つ。太宰府分類IV類にあたる。

95は、南側の溝から出土した青磁碗底部である。ロクロによる成形で、高台はやや外に開き断面四角形状を呈する。底径は広く、器壁、釉薬は共に厚ぼったい。高台内側は露胎となる。太宰府分類I類に比定される。

119、120は泥岩製の砥石である。119は、下半部が顕著に使用されており、下端部は薄く尖る。119、120共に、中砥、仕上砥に使用されたものと考えられる。



第26図 SD25・SD28・SD30・SD35出土石製品及び金属製品 (111・113~117は1/8、112・118~120は1/3)

遺構番号	挿図番号	種類	出土層	器種	法量(cm)			図版番号	紋様	備考
					口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)			
SD9	19	珠洲焼	上層	擂鉢			(3.1)	6	櫛目波状文	吉岡編年IV期
				甕		8.6	(3.9)			吉岡編年IV～V期
SD16	20	珠洲焼	中世土師器	皿	8.4		(2.0)	5	9	宮田編年IV期
				皿	8.4		1.9		8	
				皿	10.1		(1.9)		10	
			青磁	碗	15.2		(3.5)		26	太宰府分類III～IV類
			瀬戸美濃	香炉		6.6			25	藤沢編年古瀬戸後III～IV(古)
			珠洲焼	壺	13.0		(5.0)	6	1	吉岡編年V期
				壺	19.4		(3.5)			
				擂鉢			(5.2)		11	櫛目波状文
				甕			(4.3)		2	吉岡編年III類
				上層	40.0				5	吉岡編年IV期後半～V期
				擂鉢	53.0		(7.7)		4	吉岡編年V～VI期
			越前	擂鉢		13.8	(10.4)	14		吉岡編年V期
				甕		14.2	(5.6)			
							(6.1)	19		16世紀代
			漆器	下層	15.4	7.4	6.7			久々編年IIa期
				椀		8.1	3.7	7	4	久々編年IIc期
						7.8	7.2		5	
			21	柄杓	7.8	8.6	7.3	8	1	
				円形板	(14.3)		0.6		4	
				下駄	連齒下駄	(17.8)	7.2		9	
							3.6	9	1	
				硯		12.2	7.8		5	
				鉢		31.3	11.3		2	
				挽白	中層	下白			20	14世紀後半～15世紀初頭
				一石一尊仏		35.3	31.5		9	15世紀前半頃
				五輪塔	下層	空風輪	16.5		15	15世紀～16世紀
				五輪塔		水輪	22.3			
			SD22	中世土師器	皿	9.2	2.3	6		
				甕			(4.4)		9	吉岡編年III期
			SD24	珠洲焼	擂鉢	30.4	(7.2)		12	吉岡編年V期
				壺			(8.4)	15		波状紋
			SD25	円形板	円形板	17.5	0.8		8	吉岡編年IV～V期頃
				中世土師器	皿	8.2	2.1	5	11	
			23	珠洲		9.6	(2.2)		12	
				挽白	上層	上白		6	6	吉岡編年V期
			26	砥石		5.1	2.5		9	3
							0.6	5		
SD28	23	珠洲焼	中世土師器	皿	10.0		(1.9)		13	
				青磁	香炉		(4.6)		27	
				甕			(6.3)	6	8	吉岡編年IV～V期
				壺			(5.9)		7	
			越中瀬戸	下層	擂鉢		(6.0)		16	吉岡編年IV期
					鉄袖小皿	8.8	(3.3)		17	
				最下層	10.6	5.3	2.3	7	21	16世紀後半～17世紀初頭
					11.0	5.6	2.7		20	
					11.0	4.9	2.8		22	
			24		12.8		(5.1)			草花紋
				漆器	13.6	7.1	5.7		6	松皮菱紋
				下層		6.2	(6.3)		7	俵紋
				中層		7.7	(3.3)	8		久々編年IIc期
						7.8	(6.5)			
			25	円形板	下層		7.9	8	6	
			26	挽白	中層	下白			4	
				五輪塔	上層	火輪	11.0		14	
				一石一尊仏	下層		48.5	9	21	14世紀後半～15世紀初頭
SD30	23	珠洲焼	中世土師器	皿	8.6		1.9		15	宮田編年IV期
					10.2		(2.9)		14	
				青磁	碗		(3.5)	5	28	太宰府分類II類
				擂鉢		13.0	(4.3)		18	吉岡編年VI～VII期
			24	瀬戸美濃	茶碗	11.6	(5.1)	6	24	藤沢編年古瀬戸後III期
				染付	小皿	8.4	4.6		23	宝相華紋・唐草紋
							2.2			小野分類IX類(B2群)
				102	下層		7.0	7	10	久々編年IIc期
				103			(2.7)		11	井筒紋・草花紋
				104	中層		6.9		9	久々編年IIb期
				105			8.2			草花紋
			25	柄杓			8.4	9	11	久々編年IIc期
				109	下層	連齒下駄	(13.3)		10	秋草紋
				110	中層		9.7		6	久々編年IIb期
			26	五輪塔		空風輪	11.8	9	10	14世紀中頃～後半
				117	中・下層		12.0		6	
			118	砥石			20.0	10	11	
				金属製品	下層	5.6	9.7		18	
SD35	23	中世土師器	上層	皿	8.2		1.6	5	20	
					8.2		1.6		21	
					8.4		(2.2)		22	
					8.4		1.9		23	宮田編年IV期
					9.0		(1.5)		17	
					9.8		2.5		16	
					10.8		(2.5)		19	
					11.0		2.1		18	
			青磁	碗	17.6		(4.5)	9	29	太宰府分類IV類
				下層		6.4	(3.8)		30	太宰府分類I類
			26	砥石	上層	7.2	3.6	9	8	
						7.9	2.6		7	
			SD38	信楽		12.1	(5.8)			

表3 SD出土遺物一覧表

## その他の遺構及び包含層出土遺物

### SK1（第27図）

121は、伊万里染付皿の口縁部である。底部から口縁部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は内彎する。口縁内面には、淡い呉須による波濤紋が描かれる。17世紀中頃～18世紀にかけてのものと考えられる。

### 包含層出土（第27図）

122は、B区の包含層より出土した唐津三島手刷毛目茶碗である。高台脇から口縁部に向けて垂直に立ち上がる。底部の器壁は厚く、口縁部にかけて薄手となる。高台の断面形状は逆台形状を呈する。

123は、B区のSD19付近撓乱層から出土した漆器小皿である。低い直立高台に厚手の底部を持ち、内彎しながら立ち上がる。口縁部外面には稜を形成する。見込みには亀甲紋が3つ描かれ、高台裏には線刻が見られる。「大」であろうか。16世紀中葉のものと考えられる。見込みに描かれた紋様は、般若野荘に知行地があったと考えられている幕府直臣の、二階堂深矢部氏が使用していた紋に類似する。しかし、16世紀代には、二階堂氏の勢力は富山県内から消滅しているため、紋様帶の一つとして意匠されたものと考えられる。

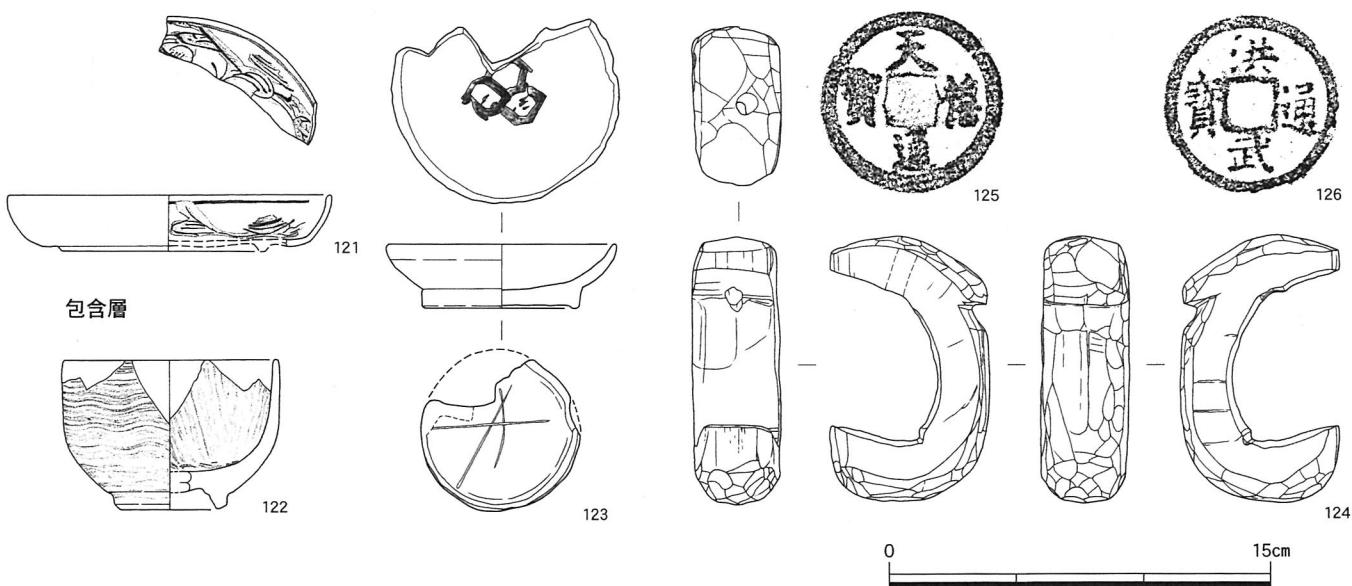
124は、A-1区の包含層より出土した自在鉤である。上面中央部分には、上部から吊す為の穿孔が見られる。下面内側は、物を引っ掛けている事で、器表面が磨耗している。器表面に施されている加工痕は、側面を整形後、上面と背面に及んでいる事が分かる。側面は上から下に、上面と背面は下から上に加工方向が見られる。同様の自在鉤は、梅原胡摩堂遺跡からも出土している。

125、126は古銭である。125の天禧通宝は北宋錢で、126の洪武通宝は明錢である。

遺構番号	挿図番号	種類	出土層	器種	法量 (cm)			紋様	写真番号	備考	
					口径 (長さ)	底径 (幅)	器高 (厚さ)				
SK1	27	121	伊万里	上層	皿	12.8	8.1	2.2	波濤紋		17世紀～18世紀
B		122	唐津	包含層	三島手刷毛目茶碗	8.6	4.4	5.9	波状文	6 25	
B		123	漆器	包含層	小皿	9.2	6.0	2.2	亀甲紋	7 12	16世紀中葉
A-1		124	自在鉤	包含層		10.5	3.5	6.0		8 14	梅原胡摩堂遺跡に類例有
A-2		125	古銭	包含層	天禧通宝	2.4				10 19	北宋錢
B		126	古銭	包含層	洪武通宝	2.3				20	明錢

表4 その他の遺構及び包含層出土遺物一覧表

SK1



第27図 その他の遺構及び包含層出土遺物 (121～124は1/3、125・126は1/1)

## IV 総括

今回の調査で検出された主な遺構はB区から集中して検出された。遺構の切り合いによる新旧関係及び出土遺物から、中世における安吉遺跡の時代変遷が3時期にわたる事が確認できた。各時期の概要は以下の通りとなる。

### I期【15世紀代】

B区のほぼ中央で検出されたSK33や、SE1・SE7が当該期にあたる。検出された遺構は散発的であり、集落構造は判然としない。特筆すべき事に、SK33より木札が出土した事が挙げられる。木札には「□（金カ）山馬札 □（斗カ）□（花押）」と書かれており、書体は14世紀から15世紀にかけて見られるものであった。出土した木札は馬を荷とした輸送行動を示すものと考えられる。

### II期【16世紀前半～中頃】

B区の東側で検出された南北方向の大溝SD16や、それに平行するSD22、方形の区画溝であるSD35が挙げられる。I期で検出された散発的な遺構とは異なり、各遺構の軸方向が南北に合わさる様子が窺える。遺構に区画性が生じ、規模が拡大するのがII期の特徴と言えよう。

### III期【16世紀後半～17世紀前半】

II期に掘削された南北方向の大溝や方形区画溝SD35等が埋められ、新たに東西方向の大溝が掘削される時期である。B区のSD24・SD25・SD28・SD30がこれにあたる。また、A区のSD8・SD9やC区のSD43は、溝の形状や軸方向、他の大溝への間隔がほぼ同じである事等から、III期に帰属するものと考えられる。その他、SE4やSE10、SK53等がこの時期にあたる。

### 総括

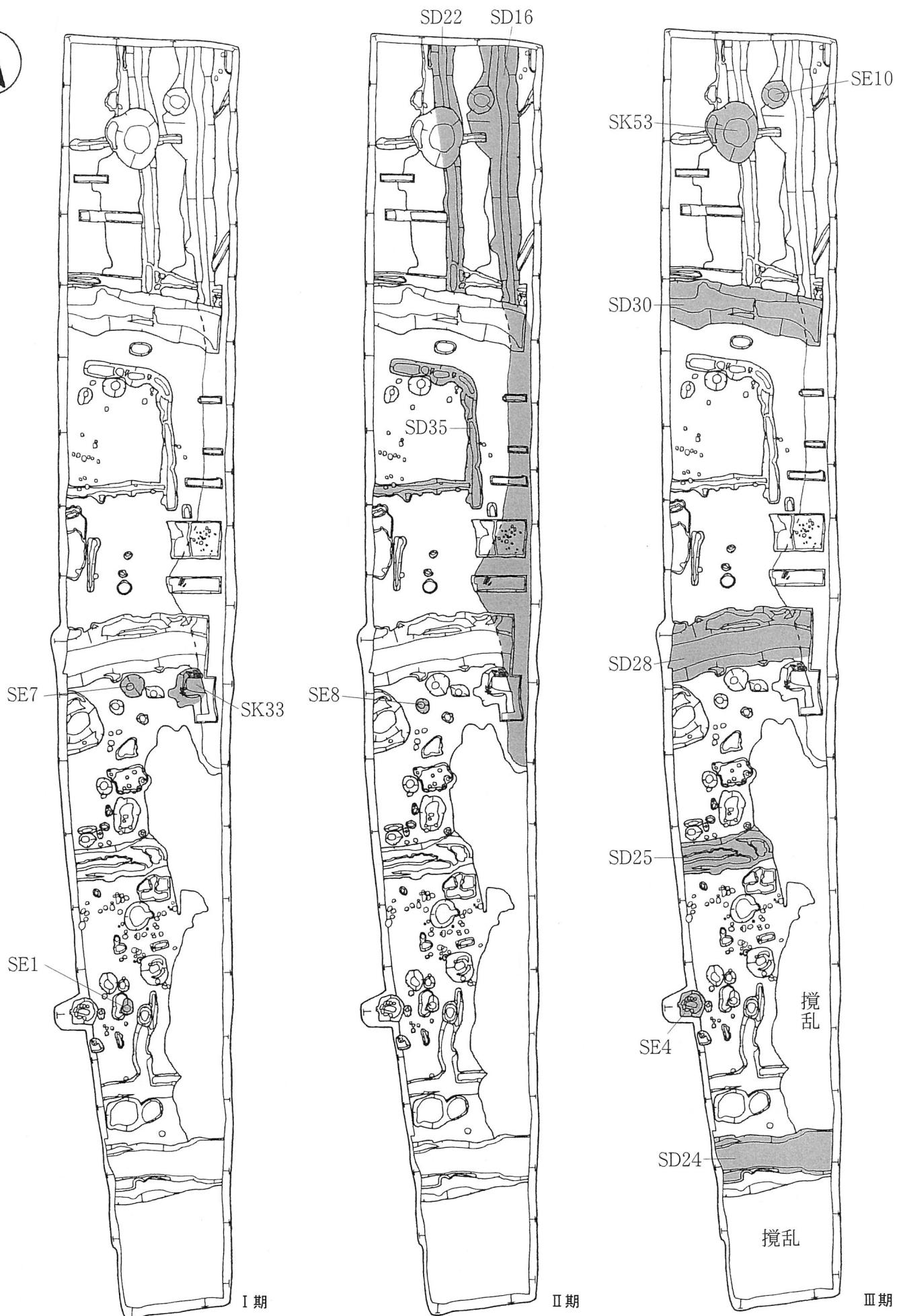
今回の調査では古墳時代・中近世の遺構を確認した。検出された遺構は土坑・溝・井戸があり、そのほとんどは中世に帰属するものであった。遺構からの出土遺物は、土師器・中世土師器・珠洲焼・中国陶磁器・瀬戸美濃・越中瀬戸・伊万里・漆器椀や曲物をはじめとする木製品・五輪塔・石臼といった石製品等、多岐にわたる。また、木札といった文字資料も出土し、中世における安吉遺跡の歴史を窺い知ることができた。検出された遺構や遺物、文献資料等から、中世安吉遺跡と周辺の状況について記述し総括したい。

I期は、安吉遺跡が集落として展開していた時期だと考えられる。検出した土坑や井戸等の遺構からは、集落構造まで確認することは困難であった。しかし、SK33からは物資の流通活動を示すと考えられる木札が出土している事から、安吉遺跡一帯が交通の便に恵まれた立地であったと推察する事ができよう。

II期になると遺跡の様相が一変する。調査区内を南北に走る溝と、それに並走する溝や、遺構の軸方向を合わせたものと意識される遺構が見られるようになる。それらの遺構はI期に比すると大掛かりなもので、多数の人工を必要とする組織的な行為であった事を窺い知る事ができる。

III期では、II期の溝に直行して東西の溝が掘削されるようになる。溝の上幅は最大で3.8m、最大深度は1.0mとかなり大規模なものとなり、各溝の軸方向と溝間の幅には一定の企画性が見られた。また、これまで見られなかった石組み井戸も検出されるようになり、II期同様大掛かりな力がはたらいていた様子を窺い知る事ができる。

II～III期にかけての出土遺物として、武田下条氏の家紋を模した漆器椀を始め、総数20点近くの漆器椀が出土している事や、III期の遺構から青磁盤や香炉等が出土した事が当該期の性格を表しているものと考えられる。中世の絵巻



第28図 B区時期別遺構図 (1/400)

物には武家や僧侶、長者の生活場面のなかにこれらが描かれていることが確認でき、富裕層が所有するものであったと考えられる。また、県内での出土遺跡についても願海寺城（富山市）や仏生寺城（舟橋村）などの城館や石名田木舟遺跡（福岡町）などの城下町と考えられる遺跡で出土することが多く、当該期の安吉遺跡は一般的な集落とは異なった性格を有していたものと考えられる。遺跡の廃絶時期として、東西溝SD28の下層より16世紀後半～17世紀初頭の越中瀬戸小皿が出土している事から、安吉遺跡は17世紀初頭以降に耕地化されていったものと考えられる。

安吉遺跡は、中世越中における物資の集積地である放生津と、神保氏の拠点である増山城を結ぶ神楽川の流域にあたる。そして、東西の陸路では守山城や中田と日の宮城や富山城を結ぶルートに近く、交通の要衝として重要視されていたものと考えられる。Ⅱ・Ⅲ期は越中守護代であった神保氏の動静や織田氏と上杉氏との抗争、佐々氏および前田氏の越中入国など支配層の状況が大きく変化する時期であり、本遺跡もこれらに影響して遺跡の様相が大きく変化したものと考えられる。

以上のように、安吉遺跡Ⅰ期は集落の様相を呈していたと考えられ、Ⅱ・Ⅲ期では短期間であるが富裕層の屋敷地あるいは居館的な性格であったことが看取される。その後17世紀になると前田氏による越中支配が確立し、この時点では安吉遺跡は廃絶したのであろう。

今回は調査区が線的であったという事もあり、建物遺構を検出する事ができなかった。周辺の調査により本遺跡の様相がさらに明らかになることを望み、今後の調査に期待したい。

#### <参考文献>

- 大門町教育委員会 1981 『大門町史』
- 大門町教育委員会 1999 『安吉遺跡発掘調査報告—町道本田土合線拡幅工事に係る第3次発掘調査報告—』
- 婦中町教育委員会 1993 『小倉中稻遺跡発掘調査報告』
- 久々 忠義 1986 「富山県内出土の漆器について」『大境第10号』 富山考古学会
- 久々 忠義・林寺 巖州 1994 「射水平野の遺跡 一神楽川流域を探るー」『大境第16号』 富山考古学会
- (財) 富山県文化振興財団 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告(遺物編)』
- (財) 富山県文化振興財団 2004 『道場Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告』
- 新湊市教育委員会 2001 『新湊市埋蔵文化財分布調査報告V』
- 北陸中世考古学研究会 2000 『中世北陸の石塔・石仏』
- 北陸中世考古学研究会 1999 『中世北陸の石文化Ⅰ』
- 北陸中世土器研究会 1997 『北陸の漆器考古学—中世とその前後—』(第1分冊)
- 北陸中世土器研究会 1997 『北陸の漆器考古学—中世とその前後—』(第2分冊)
- 吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 宮田 進一 1997 「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房
- 四柳 嘉章 1997 「北陸の中世漆器」『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房

## V 大門町安吉遺跡出土漆器の塗膜構造調査

(株)吉田生物研究所

### 1 はじめに

大門町に所在する安吉遺跡から出土した漆器7点について、その製作法を推定する目的で塗膜構造調査を行った。以下にその結果を報告する。

### 2 調査資料

調査資料は、表5に示す漆器7点である。

No.	保存処理No.	資料No.	遺物名	樹種*	概要
1	3	9	漆器椀	ブナ属	内面には黒色地に赤色で文様が施される。この文様には明るい色調と暗い色調の2種類の赤い色調が認められる。外面は無文で全面が黒色。
2	4	11	漆器椀	ブナ属	内外両面ともに黒色地に赤色で扇文が描かれる。
3	5	12	漆器椀	ブナ属	内面には黒色地に赤色で文様が施される。外面には下地が露出しており、漆がほとんど残存しておらず、文様の有無は不明であるが、黒色の地色である。
4	6	13	漆器椀	ブナ属	内面には黒色地に赤色で扇文が描かれる。外面にも黒色地に赤色で扇文らしき文様が描かれる。
5	7	15	漆器椀	ブナ属	内外両面とも黒色地に赤色で文様が施される。文様の意匠は不明。
6	8	19	漆器椀	ブナ属	内外両面とも黒色地に赤色で文様が施される。文様の意匠は不明。
7	9	20	漆器皿	ブナ属	内面には見込みに赤色で丸に×文が描かれる。外面は無文で全面が黒色である。

表5 調査資料

また、各資料とも文様部に損傷が見られない場合には、そこからの試料は採取しなかった。

### 3 調査方法

表5の資料本体の表面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

#### 4 塗膜断面の観察結果

No.	器種	部位	写真No.	塗膜構造（下層から）			
				下地		漆層構造	顔料
				膠着剤	混和材		
1	椀	内面（文様部）	1	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
		外面	2,3	柿渋	木炭粉	透明漆	—
2	椀	内面（文様部）	4	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
		外面（文様部）	5	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
3	椀	内面	6	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
		外面	7	柿渋	木炭粉	透明漆	—
4	椀	内面（文様部）	8	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
		外面（文様部）	9	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
5	椀	内面（文様部）	10	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
		外面（文様部）	11	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
6	椀	内面（文様部）	12	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
		外面（文様部）	13	柿渋	木炭粉	透明漆／赤色漆	朱？
7	皿	内面	14	柿渋	木炭粉	透明漆	—
		外面	15	柿渋	木炭粉	透明漆	—

表 6 塗膜断面の観察結果表

塗膜構造：下地、漆層と重なる様子が観察された。

下地：全点ともに褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地がみられた。

漆層：下地の上に黄褐色を呈する透明漆層が1層観察された。文様が施される場合には、その上に赤色漆層が1層みられた。透明漆層の上面は平坦で、層厚も安定している。No.7については、その他の資料に比べて内外面とも透明漆層が薄い。赤色漆層には漆に赤色顔料が混和されている。

顔料：赤色漆層に混和された赤色顔料は、それぞれが粒子の形態をとり透明度が高い。その様子からこの赤色顔料は朱である可能性が高い。

#### 5 摘要

- ・大門町に所在する安吉遺跡から出土した、中世から近世の漆器椀6点と漆器皿1点について塗膜構造調査を行った。
- ・木胎、下地、漆層という構造が観察された。
- ・全点とも柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地の上に、黄褐色の透明漆層が1層観察された。文様部には、その上に赤色顔料を混和した赤色漆層が1層みられた。
- ・赤色漆層に混和された赤色顔料は朱の可能性が高い。
- ・今回調査した漆器7点には、ブナ属の木胎の上に比較的単純な構造の塗膜が施されていた。ブナ属の木胎は大量生産品に使用されたもので、塗膜構造が単純な点と符合している。

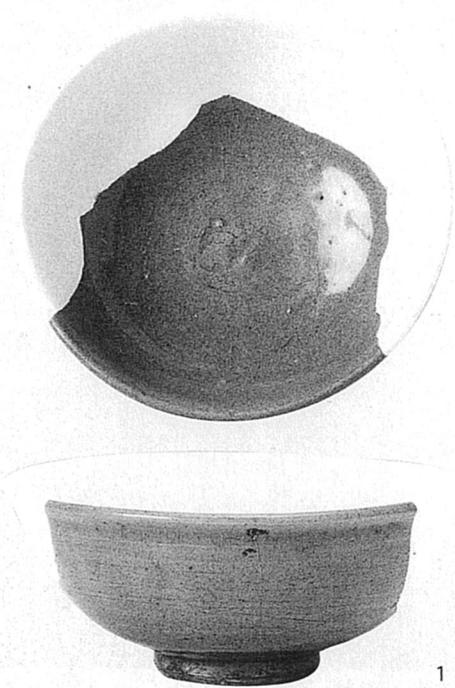


全景写真（北より）A区（奥）、B区（手前）

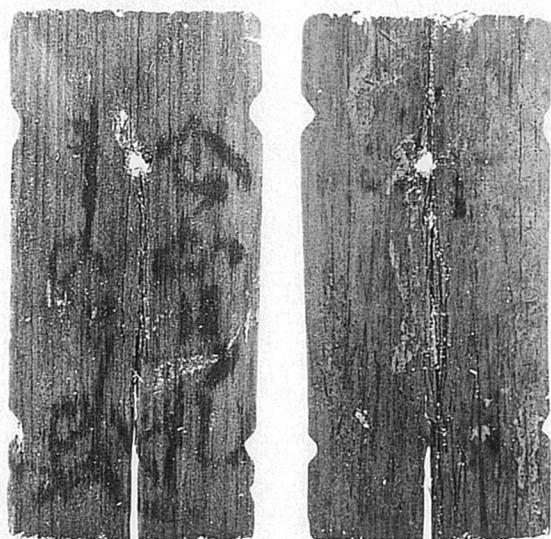


全景写真（南より）C区（手前）、D区（奥）

図版  
2



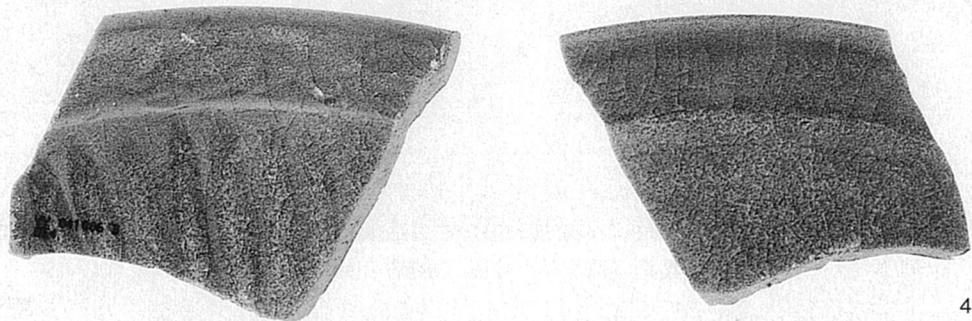
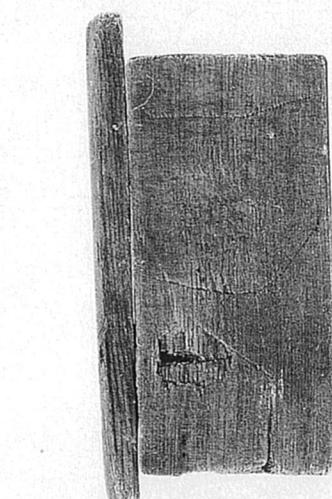
1



2



3

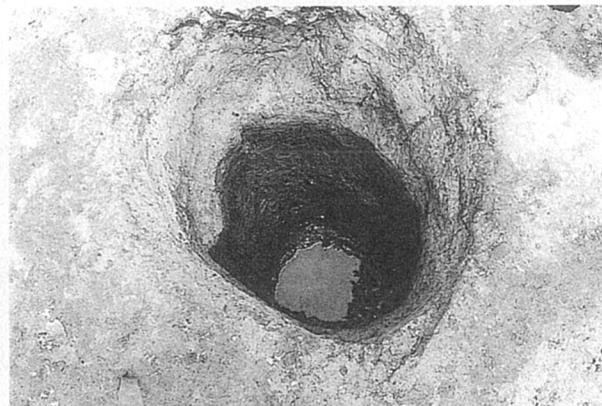


4

1. SK33出土青磁碗 2. SK33出土木札 3. SE1出土木箱 4. SE4出土青磁碗



SK33 木札及び青磁碗出土状況（東より）



SE1 完掘状況（南より）



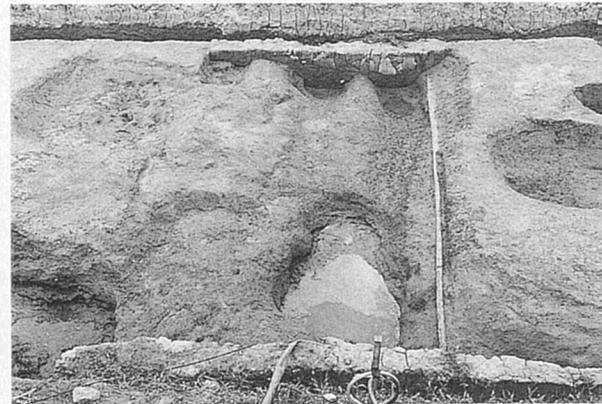
SE4 裁ち割り（東より）



SE15 曲物出土状況（東より）



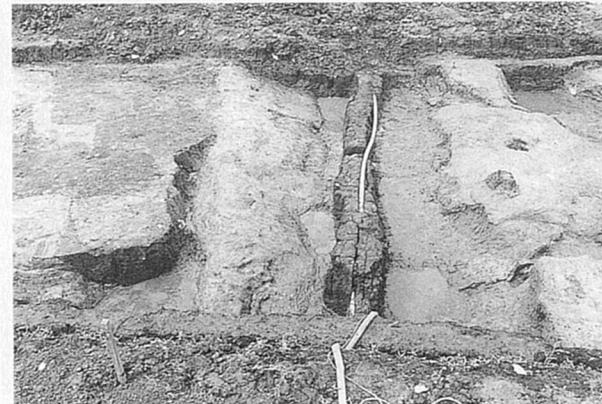
SD9 完掘状況（東より）



SD13 完掘状況（東より）



SD16・SD22 掘削状況（北より）



SD24 完掘状況（東より）



SD25 完掘状況（東より）



SD28 完掘状況（東より）



SD30 完掘状況（東より）



SD30 縦杵出土状況



SD35 完掘状況（東より）



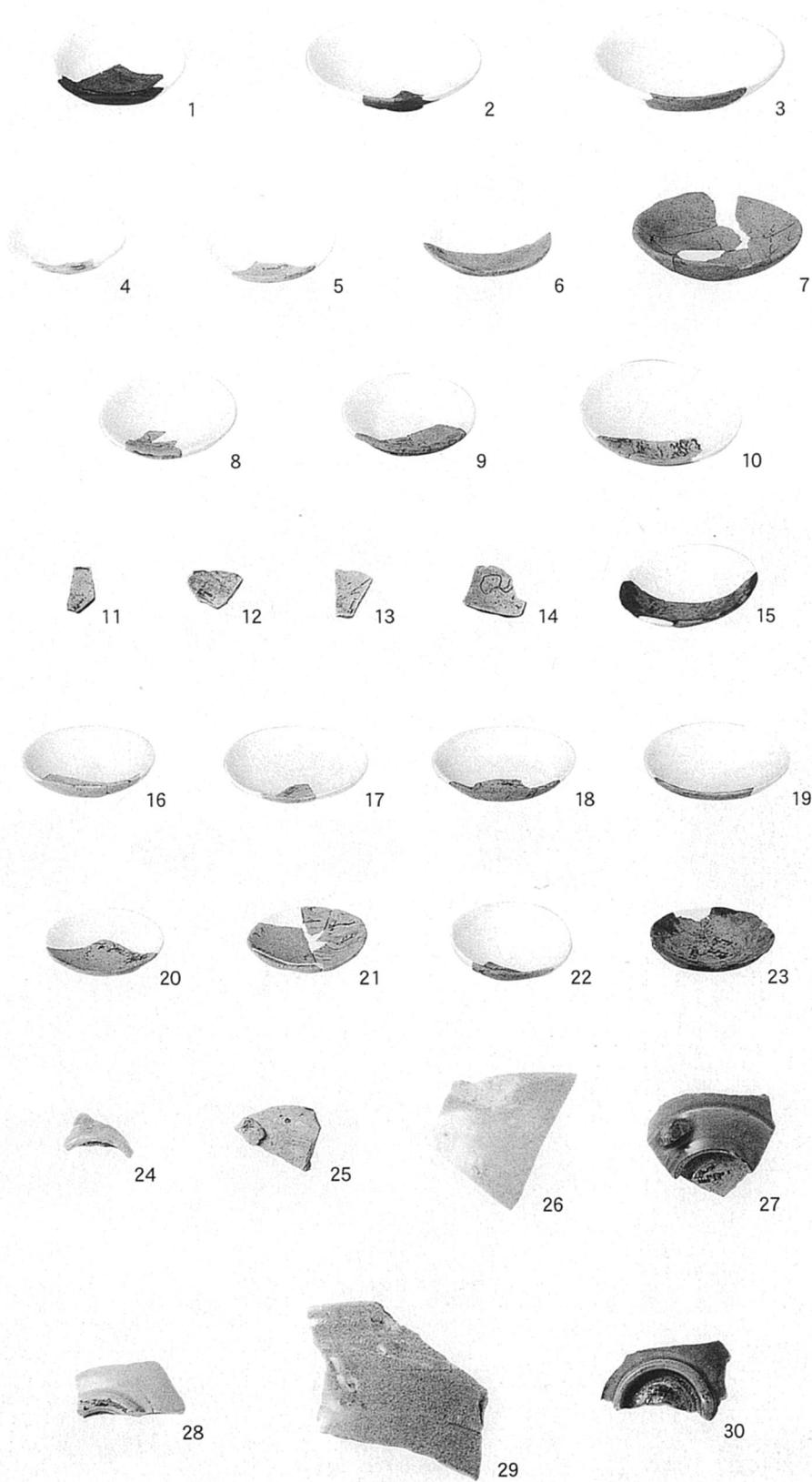
SD43 完掘状況（東より）



C区 完掘状況（南より）

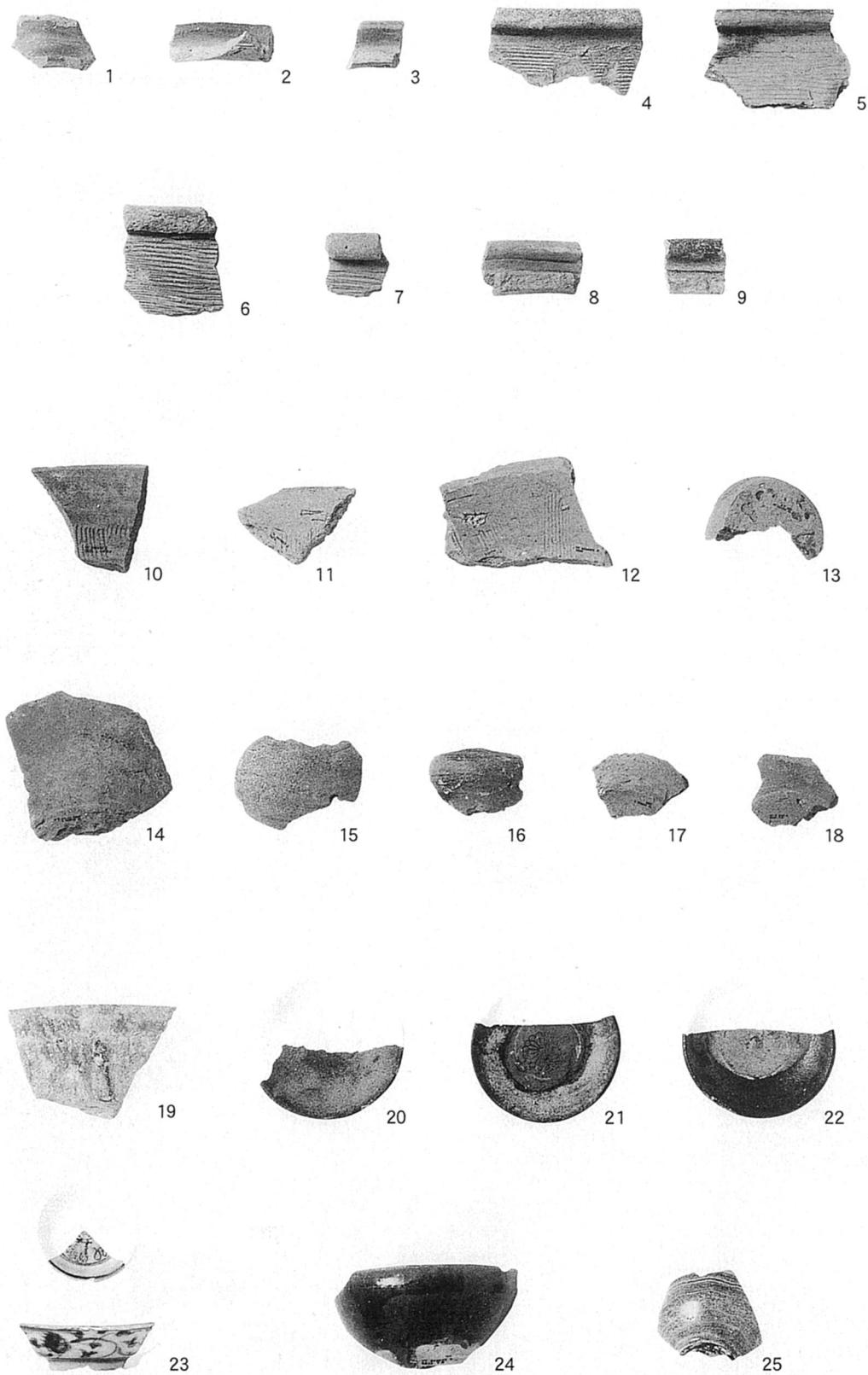


作業風景

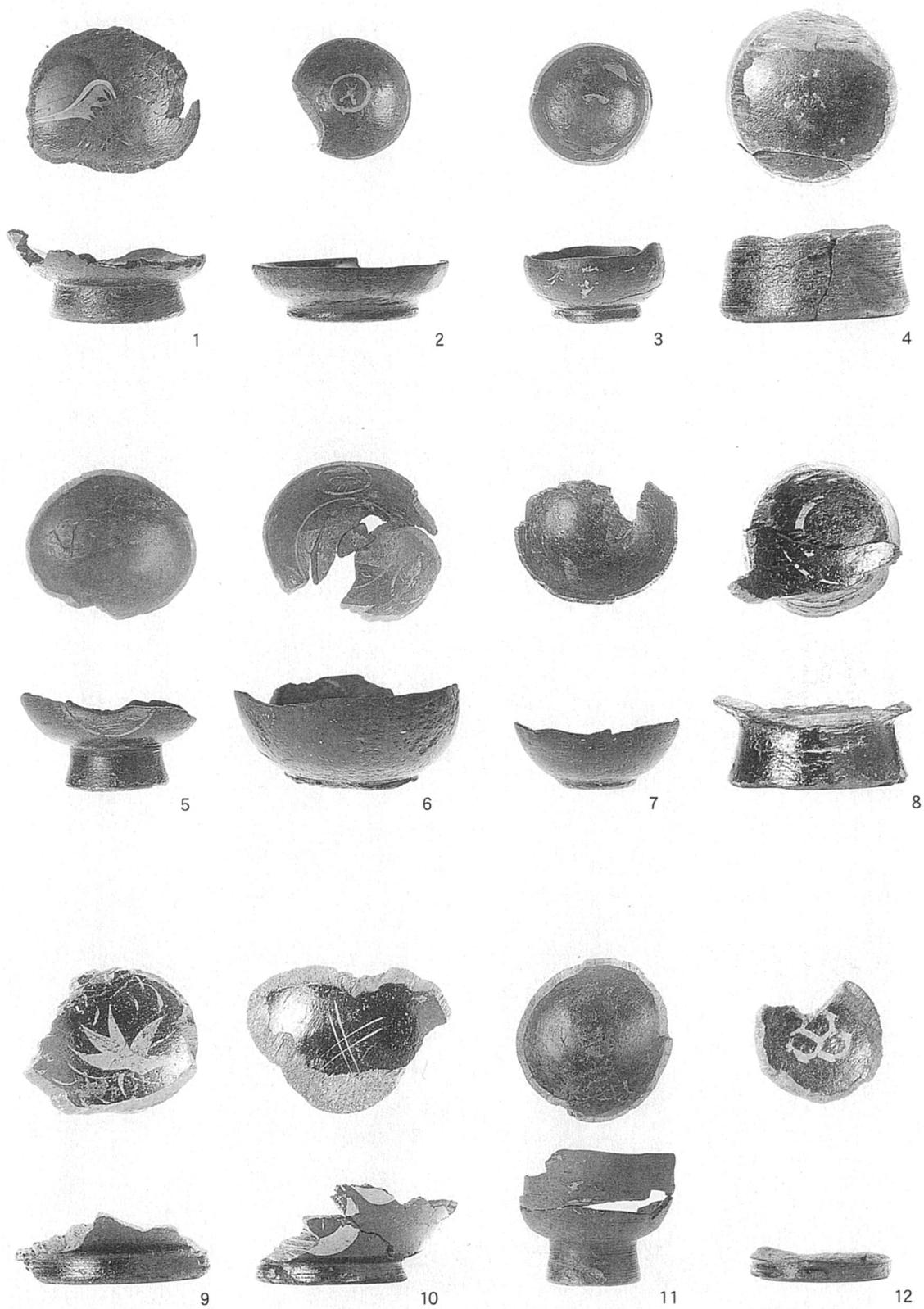


出土土器

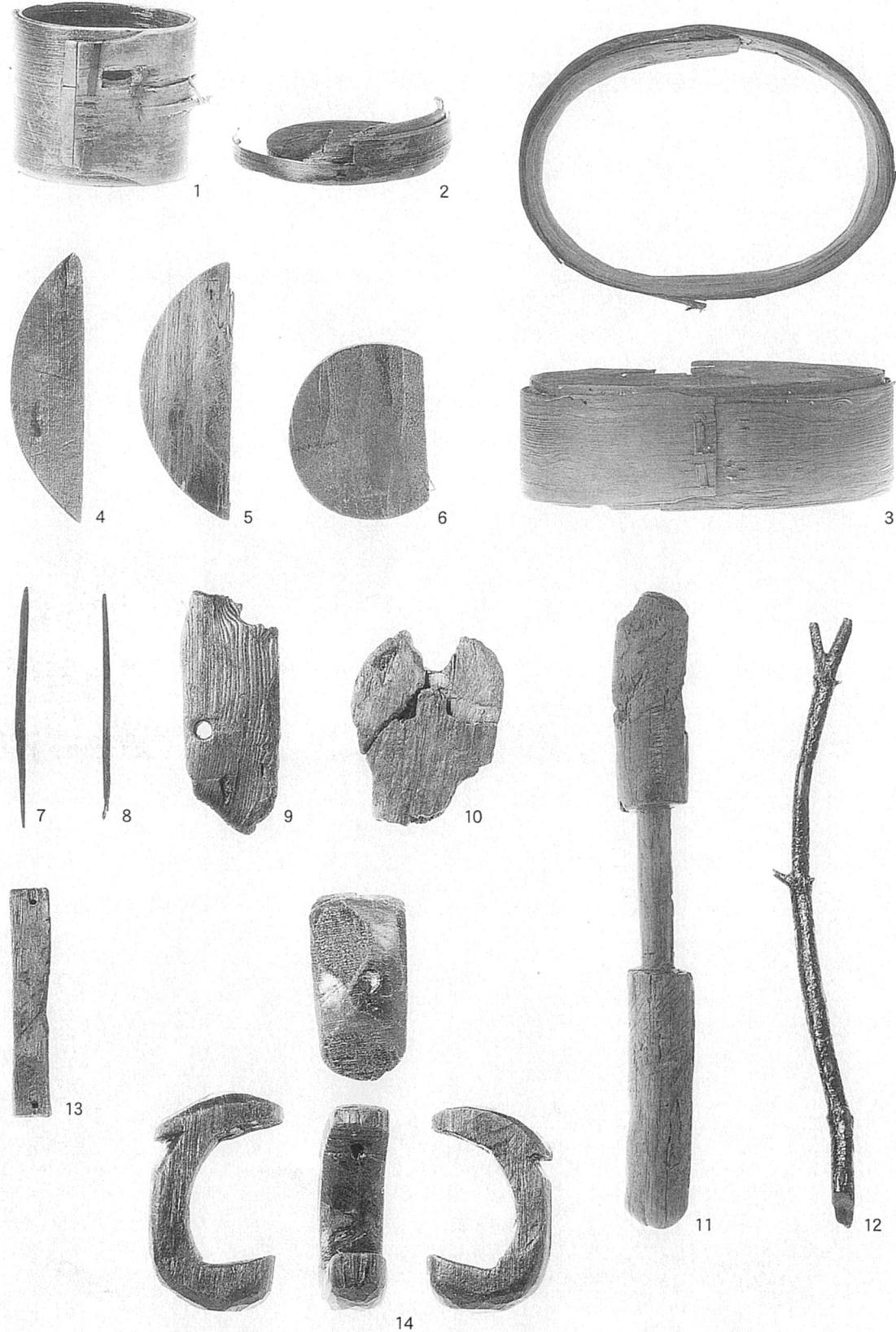
図版  
6



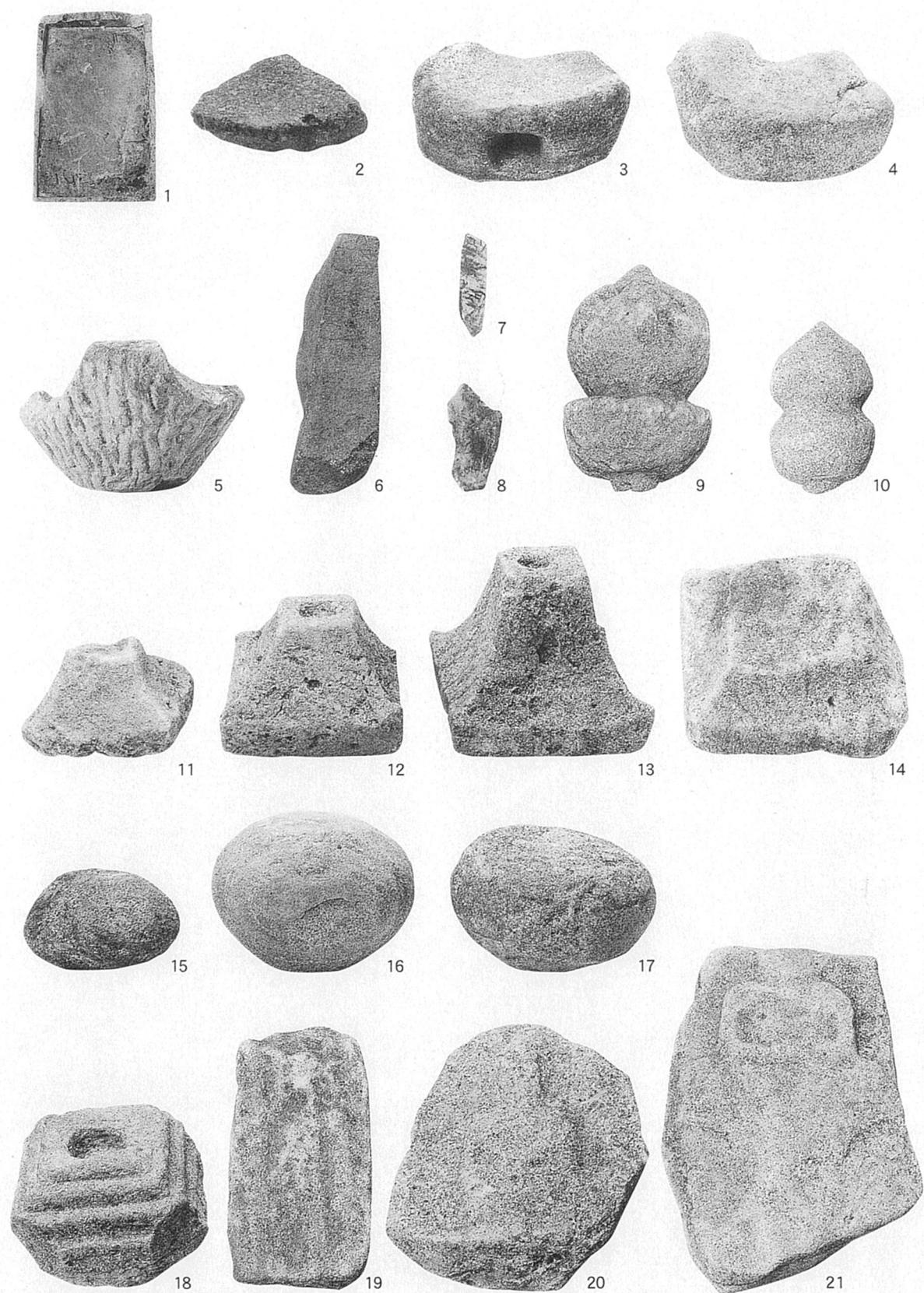
出土土器



出土漆器

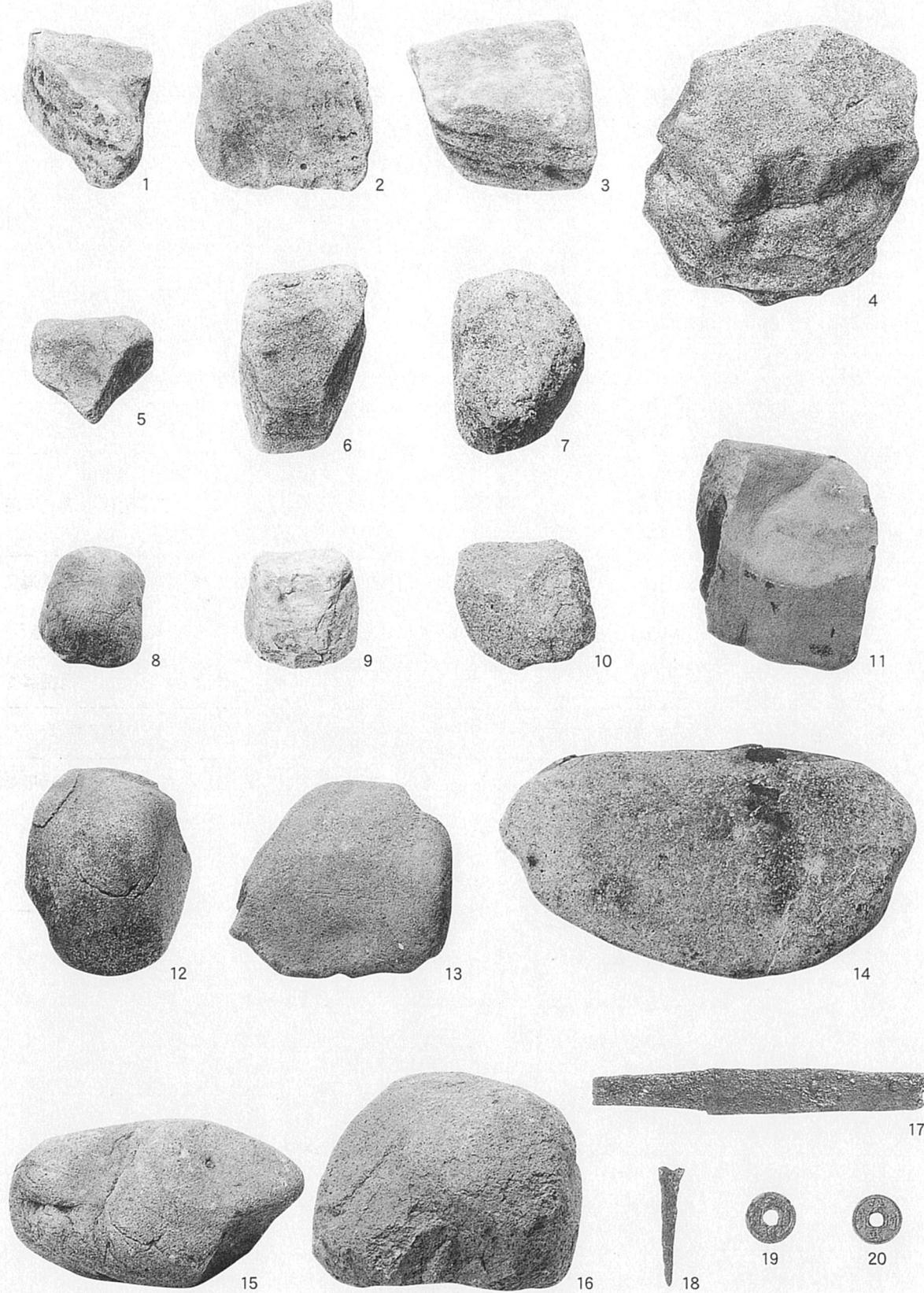


出土木製品



出土石製品

図版 10



石材及び金属製品

# 報告書抄録

ふりがな	やすよしいせきはつくつちょうさ ちようどうしようげんじあかいせんぞうせいにかかるまいぞうぶんかざいはつくちょうさ							
書名	安吉遺跡発掘調査報告 -町道生源寺赤井造成に係る埋蔵文化財発掘調査-							
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	21							
編集者名	尾野寺克実 松原哲志 新宅輝久 藤田慎一							
編集機関	大門町教育委員会 株式会社中部日本鉱業研究所埋蔵文化財調査室							
所在地	富山県高岡市西藤平蔵581							
発行年月日	2005年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村名	遺跡番号	°' "	°' "			
やすよし 安吉	だいもんまちやすよし 大門町安吉	163821	382050	36° 43' 08"	131° 04' 16"	20040624 ～ 20041031	4750m <sup>2</sup>	町道造成 に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
安吉	集落及び 居館	中世	土坑 井戸 溝	中世土師器・珠洲・青磁・染付 瀬戸美濃・越中瀬戸・伊万里 木製品・石製品・金属製品・古錢				文字資料の木札が出土 区画性を持った 大溝を検出

大門町埋蔵文化財調査報告第21集  
**安吉遺跡発掘調査報告（3）**  
 町道生源寺赤井線造成に係る埋蔵文化財発掘調査報告  
 発行日 平成17年3月  
 発行 大門町教育委員会  
 編集 大門町教育委員会  
 株式会社中部日本鉱業研究所  
 印刷 とうざわ印刷株式会社



